

第4章 現在を生きることで未来を育む女性：生涯キャリアと職業との関わり

本章は、女性が青少年期の新規就職から中年期後半になるまでの生き方、考え方を職業とのかかわりを中心にして分析している。女性の職業キャリアについては、女性が母性を備えている性であること、現在までの日本社会においては、さまざまな社会活動の分野で男性とは異なる役割を期待されている実態があること等から、男性の職業キャリア形成とは異なる視点からの分析を加えることが必要だと思われる。

個人のキャリア研究では、レヴィンソン, D.J. が個人の長期キャリアの緻密な分析をもとにライフサイクルの研究を行った。その結果は、『人生の四季 (The Season's of Man's Life)』として一冊の本にまとめられ、世界的に有名になった。しかし、この研究はアメリカの男性を対象としたものである。レヴィンソンは女性のライフサイクルの研究は男性のそれとは別に行うべきだと考えていたからである。

女性のキャリア形成について研究するには、レヴィンソンのように、また、多くの女性問題研究家が主張するように、結婚、出産、育児に関わる女性固有の問題に重点をおいた分析が必要であろう。

そのため、本報告書では女性の調査対象者のみを取り上げて、現代の日本で 50 歳の年齢に到達する女性が青少年期から現在までにどのような職業選択を行い、今日までの職業、地域、家庭でどのように行動したか、それらの背景となった家庭と職業への態度はどのようなものであったかを分析して、日本の女性の職業キャリア形成の実態とあり方を考察する。

調査対象者は 19 人であり、面接による聴き取り調査を行った。ただし、本章は個々の対象者についての事例研究の形ではない。同時代の同年齢の女性 19 人の 35 年間のキャリアを通覧してキャリアの特徴や共通性等を把握、整理し、それをもとに現代日本の女性のキャリア形成の現状を考察することを基本にしてまとめることとした。

1. 女性のキャリア分析の視点

面接調査における質問項目は基本的には男性と同一である。ただし、次の 4 点については女性には男性とは異なる条件があったり、男性とは異なる行動をすることが多くみられるとの予測のもとに、結婚等による職業異動についてより具体的な内容を聴き取る (a, b)、または、職業に限らない範囲の行動をより強く意識づける (c, d) ように質問をしている。

- a. 職業の中断と再開について（結婚、出産、育児、介護によって離職、転職があったかどうか。離職して就業を中断した場合は、再開の状況。育児や子どもとの関わり方の方針）
- b. 結婚後に、職業等の社会的活動を行うために得た周囲からの支援の状況
- c. 経験した教育・訓練、研修等の能力開発の内容（職業に関するもののほか、趣味、お稽古

事等を含めての実施状況)

d. 経験した仕事の内容(職業のほかに、地域活動、ボランティア活動等を含めての実施状況)

本章における分析は、次の7つの項目を軸に据えて行った。ただし、調査はインタビュー方式で一定の質問項目を用意してそれについて聴き取っているが、自由な雰囲気での聴き取りを行っており、完全な構成的面接とはいえない面接方法になっている。そのため、全員からこれらの項目について、まったく同じ条件で聴き取っているとはいえない。その一方で、そのほかの事柄について自発的な発言を得られたものがあり、それらの発言から得られた情報で調査対象者が自ら強調するなど重要だと思われるものについては、極力、分析の中に取り入れるようにした。

(分析項目)

①経験職業数、② 青少年期に行った初職の選択の動機と背景、③ 両親の職業に関する考え方等青少年期の家庭の特徴、④ 結婚当時の配偶者の家庭観等結婚後の家庭の特徴、⑤ 配偶者との離死別の状況、⑥ 職業との関わり方、職業観、⑦ 今後、取り組みたいこと等将来計画

2. 50歳女性の職業経験とその概要

調査対象者19人のうち、1人を除き全員が既婚者である。学歴は中卒から大学院中退までさまざまであるが、既婚者全員が結婚後も職業経験をもっている(表4-1)。ただし、自己評価としては、結婚後は専業主婦であると考えている者が複数存在する。

結婚または出産を契機として、それまで従事していた職業を離れずに、その後も就業を継続した者は、雇用労働者では、養護教員(1人)、保育園の保育士(1人)、小学校教員(1人)、高校教員(1人)の合計4人である。

結婚等を契機に退職した者のなかにも、保母や教員の免許・資格を有する者はいるし、また、実際に保母等の職業に従事していた者はいる。そして、それらの者のうち、離婚後に再び取得免許と経験を生かして保母(非正規雇用)の仕事に就いた経験を持つ者が1人存在する。ただし、この事例は、保母だけでなく、それ以外の職業に就いていた時期もある。

雇用労働者でない者では、新規学校卒業時企業等に就職できなかったが、その後、ずっと在宅でピアノの講師をしているという者が1名いる。いわゆるお稽古事の先生であるが、専業としてそれに携わるという考えはもっておらず、主婦業の傍らの楽しみとし、生活のハリを与えるものとしての位置づけをしている。

結婚や出産によって、それまでの職業を退いた者は、その後、その家庭が自営業であるかどうかによって二通りの職業との関わりがみられる。

夫が自営業者である場合は、形式的には自営業の経営者の一人となっているが、実際は補

助的に家族従業員の役割を担っていると自分では考えている。そのため、事業のために行動するときには夫の指示を確実にこなす家族従業員として動いていると自分の役割を評価している。

ただし、家族従業員といっても相当の時間と労力を投入し、銀行との交渉、顧客とのトラブルの自主解決、従業員の教育、地域業界での役割分担等を行っており、客観的にみれば、相当に責任のある仕事に自主的な判断で取り組んでいる状況がある。しかし、経営者の妻であることは経営者から最も信頼される立場であり、具体的な行動は、① 経営者と一体的な存在である妻として行っており、② そうすることが当然、という基本的理念に基づいているといってもよいほど生活の自然な流れとして行っている。

他方、家事・育児と自営業の手伝いのほかは、自分自身の自覚としては、自営業の家庭の主婦となった場合は、いずれも家業の“手伝い”をしながらその合間に社会とのつながりを得るために働きに出たり、趣味や地域活動等を行うという形である。

「仕事もサポート的に手伝いながら子育てのほうに専念するという形をとりました。・・・従業員、女の子がいますので、そういうときの採用のときにはちょっと私が出ていたりとか。何かあったときにはちょっと私がその子呼んで話をしたりとか、そういうことはしていますけど。だから会社で今どういう状態になっているかということはもうわかっているようにしています。・・・はい、押さえるというか。銀行回りというか、私が主体的にしているんじゃないけど、ちょっとお金を出してきてと言うと私が行ったりとか。主人が全部やっているの。言われたことだけをやるという感じなんですけど。・・・主人にこういうふうにしたらいんじゃないのか、そういう話はしてきたと思うんですけど」(ケース 60)

「不動産って大変なんですよ、結構。書類の整理も大変だし、あと、何ていうんだろう、雑務的なものもすごく多い。家賃が遅れれば足を運んで取り立てに行かないといけないし・・・ずーっとやってるんですよ。やりながらですよ、もう。・・・今、不動産はうちの旦那が生きているからできる仕事であって。・・・あのね、そばで見てて、不動産業、大っ嫌いなんですよ、私。・・・うちは、旦那が、頭が、回ってくれてるから言われたとおりにやればいいからいいんですけど」(ケース 59)

「主人は店を経営して、経営者という感じなんですよ。・・・(私は) そういった経営に関してはほとんどタッチしてはいません。それ以外はやってる・・・銀行関係とか、あとは組合の・・・採用は主人がしているんですけど、その方が入った後をトレーニングするのは私がやることが多いです」(ケース 26)

そして、その“手伝い”の合間に、「ジーとしてられない」ので、自分自身の中にメリ

ハリをつけるために自営業とは別にパートやアルバイトしたり（ケース 59）、趣味やスポーツ（ケース 60、ケース 26）をしている。それらは、次のように語られており、3例とも職業との関わりとしては、自分が主体となって家事・育児などの家庭運営の責任を果たす傍ら、経営者の妻であるがために妻の役割として夫の自営業の手伝いをする立場に位置づけていることが把握される。

「まあ、帳簿上はお給料っていう形ありますけれど、実際に、じゃあどうかっていったらもらってないじゃないですか。夫婦中で。なもので、アルバイトで行きました。・・・あたしね、この会社入ってから、うちの旦那さんにパチンコに連れてってもらったのね。それで、あたし、子育てしてる時なんか、そういう遊びとか何とかなかったんだけど、・・・それで、なくなるのわかっててやってるんですけど、でも、お金欲しさにやってるんですよ。別にだからって生活費に充てたりとか、そういうのはないです。純然たる自分のお小遣い。生きてるあかし。うん。だって、それじゃなければ、家帰って子供のね、世話して、じゃあ、自分、何があるんだらうって思ったときに、このくらいいいじゃないか思っちゃうんですね」（ケース 59）

「その時点で・・・何となく流されてきたというところで、何かやりたいというのがすごくあったんですね、反面。気持ちの中で。いろいろその時点で子育てをやりながら、子供が幼稚園に行きだしたころから、いろいろ手芸的なことがすごい好きだったのでパッチワークだとか、とか、刺繍とか、ちょっといろんなところを探して・・・自分が持っているものがひとり立ちをしてプロとしてやっていこうというほどのものでも、そこまでやってしまうとまた亀裂っていうんですか・・・子供を責任持って育てていくほうをとるというんですか」（ケース 60）

自営業に近いものでは、結婚して同居した夫の実家が農業であった事例がある。この場合は、夫自身は雇用労働者であったが、同居する夫の両親が農業を経営しており、嫁としてその事業を“手伝い”ながら、ある時にパートタイムで勤めに出ている。パートタイムで働きに出ることによって“自己主張をはじめた”というものである（ケース 39）。その後、複数の職業、職場を経験している。現在の職場ではパートリーダーの役割を果たしている。

「（継続的にパートに出るようになる前に、一度、婚家に反発した期間があり）私。そのパートに出始めてからずっとパートなんですけど、その養蚕をやって、その後ちょっと反発した期間があって。縫製会社がこのそばにあるんですよ。そこに1年・・・2年行ったかな。・・・上の子が中学に入ってから継続的にパートにでた」

「同じ年代のお嫁さんたちが子育てを家でしているわけですよ。サンダルを履いて、エプ

ロンをかけて、ほんとうのお嫁さんという状況を見て、私は農家をやっているわけです。何でこんなに差があるんだろうという、そのときにはじめて、多分、反発を持ったんだと思うんです。だから、私もそういう状況に置かれたいのに、それは許されないですよ。農家ですから、養蚕があつたりするわけですから。その中で、きっと私もそういう支度をして、子供の面倒を見てという、それが私の頭に多分あつたんだと思うんですよね。だから、それを周りを見ていて、何で自分はこういうふうにと。・・・その後、養蚕をやめて農家だけで。・・・私が（継続的に）パートに出たのできっとやめざるを得なかった」（ケース 39）

自営業家庭でない場合は、パート・アルバイトの形態で実にさまざまな職業に就いてきている。複数の職業を経験し、家事、育児等の合間に社会の空気を吸って、収入も得るという形である。その場合、職業の選び方は、職業資格や過去の職業経験を生かすといった能力や資格にこだわる選択の志向はほとんど見当たらない。重要なのは、通勤の容易さ、勤務時間の短さあるいは柔軟さ、休暇取得の自由度の大きさ、知り合いからの紹介があること、人間関係の好ましさ等々である。

こうした就業条件を職業選択の基準とすることは、自営業の家庭であっても基本的に同じである。また、学歴による違いも見出せない。学歴についていえば、新規学校卒業時の初職の選択では求職活動の方法、職種などについて学歴ごとの特徴があった。しかし、結婚後の再就職では求職活動の方法にも、職種にも、それはなくなっている。職業活動だけでなく、ボランティア活動や趣味等の内容や方法においても特段の学歴差は感じられない。

なお、ただ一人の未婚者は、高校に入学する以前の 10 歳代半ばから鍼灸師を目指しており、大卒後、希望通り鍼灸師になった。その後は、ずっと鍼灸師としてのキャリアを積み重ねている。鍼灸師の職業と関連の深い食事療法家等の他の職業の知識や技術について学習や修練を行っているが、それは鍼灸師としての技術の幅を広げたり、高度化したりするためであり、職業としては鍼灸師 1 種のみである。

表 4 - 1 経験職業数

ケース	経験職業数	最終学歴
5	1種（養護教諭）。ただし、転勤あり。	短大
6	多種。保母と保険外交のほか、家族従業者、スーパー店員等さまざま。保母としては4府県を経験	短大
15	2種。事務と電話交換。電話交換が長い。出産後、退職して専業主婦。下の子が3歳で復職。電話交換手（契約社員）	高卒後に専門学校
16	4種。幼稚園教諭、豆腐店でアルバイト、市民病院の看護助手に加えて生協役員	短大
19	4種。画廊の事務職→銀行関係の事務職2種（テレフォンバンクのオペレーター→法人問い合わせ対応）ただし、初職以外はアルバイト	大学
26	3種。雇用は初職（大企業の社長秘書）のみ。実家の酒屋の家事従業者、コンビニエンスストア経営	大学
28	6種。証券会社（営業事務）正規社員→結婚後内職→銀行の（集金、商品販売業務）パート→友人の店の手伝いパート→昼は銀行の清掃パート、夜は保険外交員→スーパー販売パートリーダー	高校
32	4種。服飾関係の会社の経理事務→ホテルのレストランのアルバイト→同時にスナック店員→銀行の施設のレストランの洗い場パート。結婚して精神的にも安定して太れた。今というフリーターだと思う。	大学院中退
36	1種。小学校の教員6校（大阪と兵庫）、労働組合の女性部長を47歳から50歳頃に3年間程度経験	大学（夜間）中退
39	5種。縫製（初職と第2職）→農業（家業）→農業を手伝いながら縫製（パート）→農業とクリーニング（会社を替えて2回）→農業と事務用品の組み立て工。	中学
40	5種。販売→事務職→（夫の転勤で退職）→内職（電化製品の部品等）→内職と同時に水道の検針（パート）→内職を辞めて水道検針と花屋の手伝いパート（週2日程度）	高校
45	2種。家業の縫製の手伝い→公立校の保育士（初期のアルバイトを含む）。区内の転勤で3園を経験	短大（通信制）
46	4種。食品（せんべい）製造会社の事務職（3年）→建て売り住宅を扱う商社の事務職（3年）→専業主婦の後の再就職ははじめは会社の都合で時間が不規則（3年程度）→電気部品製造のパート。フルタイムでやりがいがある会社に転職、パートのリーダー。現在まで継続	大学
58	1種。学校（声楽科）卒業と同時に、就職せずにピアノの講師をする。現在まで。稽古にいていた先生に憧れていて、2,3年前にどうしても会いたくて、居所を調べて30年ぶりくらいに会った	短大
59	正社員として2種、家族従業者として1種、役員として1種のほか、多種多様なアルバイト、パートを経験。会計事務所の一般事務（1年半）→スカウトされてリゾート開発会社の事務（2年）→妊娠して結婚するので退職→実父の建設業の事務処理の手伝い（以前から家業の手伝いとしてやっていた）→夫が不動産業の免許を取って開業したのでその会社の役員となり、現在まで→夫の開業後も、自分の小遣いは、自主的にさまざまな在宅ワークやパート、アルバイトで稼いできている	高校
60	3種。銀行の事務→叔父の税理士事務所の事務→夫が経営する自営業（農機具販売）の役員（ただし、本人の自覚としては専業主婦）	短大
61	3種。アパレル会社事務（正社員。やりがいなかった。3カ月）→大学医学部研究室のアルバイト（器具洗浄、英文タイプ、実験助手、外来診療補助「面白かった、ずっとやっていたかった」）→高校教師（収入は安定したが、人間関係にいつも悩む）県内の4校を経験アルバイト先の上司から、教員試験に合格したら教員になるべきだ、「人を育てるということ、向いてるよ、きっと」といわれ、「（高校生のときなりたかった薬剤師よりも）教師のほうが面白いから、絶対なった方がよい」と後押しされた	大学
65	1種（鍼灸師、現在は診療所開業）。専門学校のと師匠のもとで2年間経験したあと、東京に出て住み込みで「食養」の勉強のため無報酬で働いてから、28歳で開業。その後、すぐにWHOの関係で中国に留学し、帰国してから、さらに資格を加えるため勉強して、出身専門学校から学院を任されて再び開業。現在に至る	大学と併行して専門学校
22	2種。海運会社の事務（庶務と経理、経理は会社が講習会に行かせてくれた）→ポストインのアルバイト。アルバイトの時（48歳頃）、長男が大怪我をし、夫の父が亡くなったことから仕事を続けられなくなった。今は、10年前から実母の介護が発生して、実家に不定期にいかねばならず仕事をみつけられない	高卒後に専門学校

3. はじめての就職

新規学校卒業時に、どのような職業にどのような考え方で就いたかをみると、表 4-2 のとおりである。初職として選んだ職業の状況に関しては、表 4-1 でみるように学歴による違いが多少みられるとよいように思われる。また、職業選択のプロセスにも学歴の違いがある。これには新規学卒時の雇用情勢が大きく影響しているが、それだけではない。男女ともにいつの時代においてもみられることではあるが、中学及び高校についての新規学校卒業者に対する当時の職業安定法上の取り扱いと大学のそれとの違いが反映していること、求人自体が対象とする学歴をある程度しぼっていること、また、それぞれの家族状況や家庭環境が学歴に反映していることから来る違いがあるということは見逃せない。中学では職業安定所の役割が強調され、高校は学校紹介と推薦が前面に出ている。大学では、自分で就職活動を進めており、大学に来ている求人到自己で当たるほか、求人誌や縁故などを通じて就職している。本調査の対象者の場合、短大卒業者は公立の幼稚園や小学校の教員、保育士になっていたため、地方自治体の教員試験等を受験している。専門学校については、保育士の場合は教員試験を受け、それ以外は業界の人材登用システムにのって就職の道を拓いている。

表 4 - 2 初職の選択動機と新規学卒時の状況

ケース	初職の選択動機	新規学卒時の状況
5	何が何でもこれになりたいという気持ちでもなかった。しかし、高校を卒業するときに、担任が「短大できちんとした資格が取れるもの」を進学先としてすすめた。福祉関係の仕事をしたという気持ちはあったが、経済的に4年制の大学に行けないので断念。九州地区内、短大で資格が取れるという基準で、経済面、将来の就職、その他いろいろ考えて選んだ。その結果、短大卒業後に養護教員となった	採用試験の結果の関係から県外で新規就職。現在と同じ職種（養護教諭）
6	高校卒業時に、本当は県外の短大に行きたかったが、どうせなら地元に行ったらどうかという感じで短大を選んだ。短大には保育科ぐらいしかなかった。ただし、そういう短大に働きながら行きたかった。その結果、短大卒業後に保育士となる	県外で幼稚園保育士として新規就職。県外に出て働くことが希望だった。姉2人とも県外就職
15	最初卒業したときにも、こういう仕事をしたかったから就職したというほどでもない。わりにそういうところがあった	高校普通科卒業後、専門学校へ。専門学校終了後、就職。一般的な経理事務
16	本当は体育の教師にはなりたかった。4年制大学には行けないので県外の短大にした。もっと遠くへ出たかったが、離婚して男手で一つで育ててくれた父親のことが気になっていた。なかなか離れられなかったし、地元の小学校教員試験に受からなかった。何年も就職浪人はできない状態だったので、すぐに就職できた幼稚園教諭となった	幼稚園教諭として近県に就職。女ばかりの姉妹で、父親がそちらで一人で住んでいた。姉が先に婚出したので父親の面倒を自分で見ないといけないと思ったため
19	商社会社も受けたが、なぜそこを受けたかも覚えていない。そこは合格しなかった。父は就職しなくても良いという考えを持っていたが、たまたま母方の叔父が陶芸家だったので、その縁で銀座の画廊に入った。昔から絵を見るのが好きだったので、縁があるならば入ってみたいと思って入った	画廊に就職（叔父の関係）商品の出入りの管理
26	学校の成績も良く、製造業の大企業に就職、社長秘書としてよい職業経験をしていた。姉がいたが婚出したので、家を継がねばならないと思った。自分が結婚して外へ出ると両親のことが心配になると思った。実家に心を残しては結局は結婚した先で一生懸命頑張っても多分、ハッピーになれないだろうと思った。それならば、思い切ってこちらにいて自分の幸福を安心して築こうと思い、数年後に、婿取りして家業を継いだ	大手企業に就職。社長秘書。社会的地位のある人達の立派な行動をみて感銘し、今でも考え方の基本になっている
28	勉強は好きでなかったが、進学したかった。親の経済的な都合が生じて、親に頭を下げられて就職。友人に「受けましょうよ」と誘われてトップ企業だということも、業種の内容もよく知らなかった。学校推薦を受けた	高校商業科を出て、大手証券会社に新規就職。進学したかったが、親の経済的な都合が生じて、親に頭を下げられて就職
32	教師になるつもりだったが、就職事情が厳しかったので断念。親のコネでなく、自分の力で就職活動することに意義があると思った。営業職を希望し、服飾関係を望んだが民間企業も採用事情が厳しかったので、服飾関係の中小企業に就職。	新規就職。就職難だった。主に服飾関係を回ったが小企業でも、まず試験を受ける前に面接で落とされる状況だった。挫折を味わった。募集をしていないところも当たったが、4年制の女子はとらないということだった。“営業”として採用して欲しいと頑張ったが、話も聞いてもらえなかった。ようやく零細企業に近い会社に採用になった。どうしても就職したいんだったら経理なら雇うということだった。国文科ですぐには経理ができないのでアルバイトのような形で入社した。その後、上司の課長の配慮で経理の勉強を一からやった
36	教職員寮が市の真中であって、市の寮に入りたかった。市を受けなきゃ絶対だめだという思いで、2年間は、学校の単位をとりながら、勉強ばかりしていた。学校生活は、採用試験を受ける、だから、勉強するという事に尽きた。そうでなければ受からなかったと思う。毎日暗記しながら通ってました。それで、就職はおかげさまでできたんですね。けれども、勤めてから、そのころは短大出て教員になる者が結構いたので学歴はあまり意識してなかった。一生懸命、教員で、子供と一緒にやればいいんだと熱く燃えていた。しかし、当時の上司の主任の先生が、とにかく免許をとっておけ、後々、昇進などで良いとすすめてくれて、通信教育を受けることにも配慮してくれた	短大卒業後、新規就職。小学校教師。同時に大学（夜間）に通学。

	初職の選択動機	新規学卒時の状況
39	中卒時に安定所と学校の世話で就職	新規就職。県内の縫製会社に就職後、半年で退職し、実家に戻って近所の縫製会社に再就職
40	高校に来ている求人から自分でデパートを選んだ。とくに考えがあったわけではな いが、通える範囲であることを条件とした。製造工場は適さない思った。デパート ならどこの部門でも良いと思った。高校在学中にアルバイトでデパートにいった	新規就職。百貨店に就職。求人は多 かったのですが、受かると思って一箇所 選んだ。ダメだったらまたどこか選 べばよい状況だった
45	高校を出るときに進路を迷った。学校の先生は家業が縫製だったので洋裁学校を進 めたが、イヤだった。デザインをやりたいかったが、親の手伝いをしながら何か資格 を取ろうと思って通信制の保育科にいった。何を思ったか、急に、じゃ、どれがい いかなという感じで、保育にした。保育科はいろいろなことが網羅されていそうに 思った。気楽な、全然軽い気持ちだった。資料を取り寄せると経費も比較的安かつ た。家（自宅）の中だけの仕事が嫌だった	高校卒業時は家業（縫製）の手伝 い。その後、手伝いながら通信制で 短大の保育科に入学し、卒業。「遊 んでいるような身分ではなかった が、手伝う仕事があるときとない ときとあるので、その合間に通信教育 の勉強をした。単位として必要なピ アノは近所のピアノの教室で週に1 回習って単位に認めてもらった。そ れは楽しかった
46	大卒時に求人誌で就職。夫と知り合うが、夫婦で同じ会社にいるのはまずいという 「会社のやり方」だったので自分が退職。	新規就職。学校に求人が少なく、求 人誌で食品製造に就職。教師になり たかったが、教員試験に落第。教員 試験は1回しか受けられないと思っ ていた。知識がなかった
58	両親とも勤めていたので家にいてくれれば助かるという様子だった。母が就職を探 さなくてもいいというようなことを言った。教職についても父は関係書類を持って きたが、姉が私の性格だとやっていけない、やめなさいと言った。勉強する気がな かったし、じゃ、いいわということで教員試験は受けなかった。そういう感じでピ アノをやった。ピアノは以前からアルバイトをしていた	4番目（末子）の子だった。母も教 員で、姉も教員だった。上の兄弟姉 妹は就職していた。家にいられる自 分が重宝だったようだ。アルバイト 的にピアノを教えたりしていた
59	高校の商業科を出て、とくにどういいうことではなく会計事務所に「ちょこつ と」入った	新規就職。会計事務所に就職。1年半 でリゾート会社にスカウトされて退 職
60	短大をでる時、とくに希望があったということではなく、「流されて、銀行に就職 した」	新規就職。地元銀行の隣県支店。オ ンライン移行の時期で勤務が厳しく て体調を崩し約1年で退職し、実家 に戻る。叔父の税理士事務所の手伝 いをして結婚退職。
61	大学に来る女子求人が少なくて、親のツテで地元のアパレル会社に就職したが、や りがいがないのでその夏の教員試験を受けると両親と約束して、3カ月で退職。新聞 の求人広告で隣県大学のアルバイトをみつけて就職。楽しかったが両親との約束、 アルバイト先のすすめ等があったので教員試験を受験して合格。教員となる	新規就職。親のツテで地元のアパ レル会社に就職し、3カ月で退職。高 校生の時、薬剤師になりたかったが、 理系が弱くて慣れないと悟った。 （一方で、とくに進路を考えていな かったとも述懐する）結局、大学で 英語の教員免許を取得していたの で、アパレル会社を退職した年に教 員試験を受けた
65	中学から高校に入る時に結婚しても女性が続けられる職業を選ぼうと既に人生設計 を立ててキャリアを考えていた。自分に経済的基盤がなければ、自分の人生を周り の言うとおりに決められてしまうのがイヤだった。叔母が腕の良い鍼灸師で、鍼灸 師の職業は女性が自立できるし、良い職業と思った	大学（法学部）に昼間通いながら、 同時に専門学校にいて鍼灸の免許 を既に取得していた。大学も専門学 校もどちらもがんばった。新規就職 時は、鍼灸の免許を取得し、開業の ために師匠のもとに入門し、実地の 勉強をしていた
22	洋裁専門学校を卒業時、洋裁関係の会社を希望していたが入れなかった。就職難 だった。新聞広告で求職活動。結局、海運会社に入った。	就職難だった。希望の洋裁関係の会 社に入れなかったので、新聞広告で 求職活動。珠算3級が評価されて海 運会社に入った。入社後、会社が費 用負担して経理や華道を学んだ。華 道では資格もとらせてくれた。社内 で仕事が変わり、良い経験をした。今 でもその会社の名刺もっている

次に就職についての希望がはっきりしていたかどうかという点では、初職の選択行動は大きく4つのタイプに分けられる。

- ① 就きたい職業が決まっていたわけではないが、そのときに選べるものの中から選んだ
- ② 就きたい職業が決まっていて、それに向けて行動して成功した
- ③ 就きたい職業は決まっていたが、成功しなかった、あるいは成功の見込みがなかった
ので、希望を変更して就職した
- ④ 進路の選択について、就職や職業以外の希望があってその選択の結果、就職する職業
が絞られた

調査対象者全体の傾向としては、この4タイプのなかで①が最も多く、また、その他のタイプについても、内容をよくみると、どのような職業につきたいかということについては、ほとんどが、はっきりした考えを当時もっていたとはいえない。

まず、19人のなかで、とくに就きたい職業や職業選択の特別な基準があったわけではないとする者は11人おり、最も多い。このうち、そのようにして就職した職業を数年後に退職した者は8人いる。その退職理由は、他社からのスカウト(1人)、真に健康上の理由(1人)、親の世話や家業の継承(1人)、結婚・出産(3人)、やりがいのなさ(1人)といったことである。すなわち、「やりがいのなさ」という職業への不満で退職した者は1人で、その他の7人については、職業に対する不満や不適應等の不快さが原因で退職したのではない。また、やりがいのなさを退職理由とした者以外は、退職までそれぞれの仕事に熱意や強い関心を持って取り組んでいた、あるいは、次のような自然な形で現実と向き合って素直に仕事に取り組んだといえるものがみられる。

「ほとんどが日本画家だったので、外国の作家のも入ってきましたけれども、圧倒的に日本の画家のほうが多かったので知識は増えましたけれども、特にそのときに、ええ。・・・画廊のときは資格は必要なかったので、特に資格を取ろうという気持ちもなかったですね。ただ、画家の名前を覚えて、号が幾らだとか、そういうようなことは自然に覚えていくようになったので・・・経験で」(ケース19)

「(大企業の役員秘書になったら)今まで接したことがなかった立派な社会的な人たちの行為を目の当たりにして、刺激されることがすごく多かった・・・自分なんてどれだけ役に立つかなんか、未知数で全くわからないんだって、あなた。わからないのに、会社がどこで使おうと、ここで使ってやろう、あそこで使ってやろうと言われるところに、そこに行って一所懸命やるのが筋だって、姉が言ったんです。確かにそうだなって思って」(ケース26)

また、この①のグループの中で結婚によって初職を退職しなかった者3人の内訳は、公立校の養護教員でその後、夫と死別したこともあって現在で就業継続している者(1人)、雇用労働者でなくピアノのアルバイト講師を結婚後も断続的に続けている者(1人)、結婚以前に同じ職業で実家に近い会社に転職した者(1人)である。ただし最後の者はその第2の職場を結婚で退職している。

他方、②と③のグループは、就きたい職業が決まっていて、それに向けて行動したことがはっきりしている者であるが、全体で6人である。このうち、②で希望通りの職業に就いた者は3人、③で希望を変更して就職した者は3人である。前者のうち、就職したものの、うまくいかずに転職した者は1人である。

また、後者、すなわち、つきたかった希望を変更して就職した者3人は、その後は全員、仕事に面白さや意義を感じている。そして、現在、その経験を良い経験であり、高い意義があったと評価している。

新規就職後の数年間に、前者後者合わせて4人が退職している。退職理由は、親の世話をした家の後を継ぐ(1人)、結婚・出産(2人)、職場不適合(1人)。その後、その職業には就いていない)である。反対に、就業を継続している者は、専門的技術をもって独立開業の自営業を目指した者(1人)と公立校教員(1人)の2人である。

「自分自身では体育の教師にはなりたかったんですけども、そういうのは4年制の大学とかも行けないし、やっぱりどうしても親のことが気になっていたんで、なかなか離れられなかったというか・・・私、女ばかりのきょうだいだったので、父親がそちらで一人で住んでいたんです。それで、父親の面倒を自分でみないといけないと思っていたので、先に姉が嫁いでいきましたのでね。・・・もちろん、幼稚園は、そうですね、楽しかったですね、やっぱり」(ケース16)。

「小さな会社だったものだから、何でもやらされたの。仕入れも売り上げも、あとはお店に行って売り子さんをやったときもあったし、例えば、売り出しだというと、法被を着て、そういうのもやったし、何でもやったの。だから、ここで先生の希望(=教師になりたいという希望)がなくなったにしても、全然めげることはなかったんですよ。かえっていろいろな多方面の仕事ができたから、先生じゃなくても結構おもしろいじゃないのみたいな感じになっちゃったのかもしれない。・・・例えば、海苔がばあっとこちらにあったらおかしいでしょう、真っ黒けになっちゃうでしょう。この配分の仕方、海苔とか、ゴマとか、お砂糖とか、色のついた蝦だとか、そういうのをどういうふうに配色すると見ばえがよくて、なおかつ買いたいなという欲をそそるかというので、そういうのも結構ここでおもしろおかしくやってきました。・・・今もまだやっています。まだ年賀状のやりとりを、一応形式張ってだけれど

も、それは出していますね」(ケース 46)

「入社後、会社が費用負担して経理や華道を学んだし、華道では資格もとらせてくれた。社内で仕事が変わり、良い経験をした。今でもその会社の名刺をもっています」(ケース 22)

このほかに、④ のグループとして、就職それ自体を当初から考えていたのではなく、就職は結果として決まってきたものだという人々がいる。つまり、進路の選択について、就職や職業以外の希望があってその選択の結果、就職する職業が絞られたという人々である。この④のタイプとしては、特定の職業を希望していたというよりも、親から離れたいなどの地理的条件で進学したい学校を選んだり、「なにかの職業資格がとれる」学校を選んだ結果として職業が新規学卒時に絞られることになった者が2人いる。この2人とも保母となり、そのうち、1人は結婚後に退職した。もう1人も、実際は、高校卒業後、数ヶ月は自営業者の両親の家業を手伝いながら専門学校に入り、それから就職した。しかし、この者は、はじめから保母になるために専門学校を選んだのではなく、専門学校に行くことがまず先に目標としてあったものである。何か資格が取れるコース(科)に入学したいという意識はあったものの、直接的にはいろいろなコースのなかから、興味が持てないものを消去して残ったものを選んだといっている。次のとおりである。

「(通信制なら) これもやりながらかけ持ちでできるかなと思って、何を思ったか、急に、じゃ、どれがいいかなみたいな。英文、国文とかいろいろありますよね。だけど、何か英文、国文とそういう嫌だし、じゃ、保育にしようかと思って、何かいろんなことが網羅されていそうなので、短大の保育科の通信教育をやろうかななんて気楽な、全然軽い気持ちで。・・・で、お金も、資料を取り寄せたら、わりと安かった、普通に大学に行ったりするよりは。・・・中だけの仕事が嫌だったんですよ、私は」(ケース 45)。

これらのことから、新規学校卒業時の就職に当たって、本人がどのような職業選択意識をもっていたかによって、就職後の職場適応の状況が異なるとは到底いえない。また、自己の職業選択に対する満足度に差が出るということもいえない。新規学校卒業時の職業選択に当たってのそれぞれの態度は、職業の世界に対する知識のなさが欠点とされるというよりは、むしろ、無垢な態度と目をもって求人を選んでいる様子がある。それ故、求人選択に際して、周囲からの助言や注意の言葉に素直に耳を傾けている。また、それはその時だけ身近な他者から情報を得て判断しているのではなく、それまでの家庭生活や学校生活のなかで得た知識や見聞をもとに、自分なりに家族の心情や家庭の事情を勘案しつつ、当面の進路選択について総合的な判断をしようとしているとみられる。周囲から独立した個人の判断ではなく、家庭の一員としての自分自身の立場を捉えて判断をし、現実には実行可能だと実感できる

行動を選ぶ傾向がみられる。もちろん、職業経験が乏しいままで、若年者ゆえに限られた情報と経験に基づいて判断したが、それぞれが自分なりに行った自分の判断であり、自己決定であったことを認めている。

周囲からの助言については、全員が初職の選択に関して、家族との話し合いや他者の助言について述べている。この周囲との関係では、特徴的なものとしては、次のケース 58、ケース 65、ケース 28、ケース 45、ケース 59 の各事例があげられる。

最初のケース 58 は、表面的には周囲の意見に流されているだけのように見える。しかし、実際は、ピアノの指導技術を身につけていることが、自分と家族の両方の職業選択に当たった基本的な前提となっており、それが本人のパーソナリティと絡み合っ、一般就職とは別の職業との関係を選ぶことになっているともみえる。結果として、その後、結婚して夫の転勤等の関係で途切れた時期があるものの、現在までピアノの講師を続けている。そして、「働いていると認めてもらえるので、教え子達の発表演奏会を開催する」までになっている。

「卒業して、親が何か勤めていたものですから家にいてくれれば助かるという。教師して母も働いていて、私は4番目だったので何かいてもらおうと私が重宝だったみたいで、それでちょっとバイトみたいにピアノをちょっとやったりしたから、何か探さなくてもいいよみたいな感じで母が言ったんですよね。自分の上はもう働いて教員とかやっているんですけども、私はそういうふうと言われて、教職も何か、父はそういう書類を持ってきたんですけども、姉が私の性格だとやっていけないよと、やめなさいって言ったんですよ。私も勉強する気なかったし、じゃ、いいわということで受けなかったんですけども、そういう感じでピアノをやりました」

次のケース 65 の場合は、人生設計を中学時代という早期に樹立して、そのなかに結婚後の家事・育児を含めた家庭での自己の役割を見込んで職業選択の準備をした例である。職業選択のための基礎情報としては、① 中学時代の尊敬する恩師から、職業のためではなく、大学に行くことは人間としての成長にとって意義があるとの助言を得ていたうえに、② おば（伯母または叔母）が職業能力を発揮して活躍する職業的な成功モデルであった。とくに、職業選択のための情報は「おば」という身近な女性モデルからさまざまな内容のものを具体的に受信している。

その後、実際に計画通り大学に進学するが、同時に希望職業に就くために専門学校にも入学している。大学では法学部に学んだ。その理由は日本は法治国家であり、法律知識は人間として意味があるからという考えである。また、大学卒業以前に、おばと同じ鍼灸師の職業資格をとっている。卒業に前後して職業技術をより磨くために、その道の師匠の弟子として

実践訓練を受けるようになって専門能力の向上に邁進している。結果として、現在まで未婚であるが、それは結婚を納得する機会がなかったためで、今後、結婚することもありうるという構えである。なお、親も自営業であり、小切手や手形の処理など自然のうちに目にしていたという。

「私の人生の設計図はそんなところ (=大学卒業時) に始まっていないんですよ。もう高校に入るときに今の設計図をかいているの。だから中学校から (鍼灸師を考えていた)。・・・女の人って、だから結婚に対してすごくそういう意味の夢があればこそ、自分の思う、納得できる結婚でなければ結婚したくないという気があったからね。だからそのためにはどうするかということを理論立てていけばね。結局自分で自立するだけの、また周りにも説得できるだけのものがないとだめでしょう。そう考えたときに、私ちょっと性格的にお茶くみとか、そういう事務仕事とか、OLとか、そういう感じの仕事ってすごく自分の性格として嫌。・・・うん。どっちかというアウトロー的な、わりと他人幾千万行けども我行かずみたいなどころがあるので、自分が納得できないと幾らみんなが行くと言っても行かないというタイプだったので。しかも女性としたらなかなか就職もだんだん難しくなって、しかもあれだったので。だから、結局、手に職をつけるというか、昔ながらに言えば。そういう感じだったんですよ。でも中学校のときに、すごく心酔というか尊敬できる先生に出会っていて。その先生がやっぱり幾らどういう、たとえば、職業のための大学じゃなくても、やっぱり大学というのは人間としていろいろな人とめぐり会っていろいろなことを考えたりする意味で、とても大事だから、行ける環境にあるならなるべく行きなさいって言われたのがすごく頭に残っていて。だから大学は行こうと。・・・私、最初はね、鍼灸というのは、だから純粋に生活の糧で、うちのおばがやっていたんですよ。おばさんはすごく腕がいい人でね。すごくはやっていてね。多分、大分財を成したと思うんですよ。それを見ているから、おばさんの職業はいいあって。例え結婚したとしても、結構自分の、例えば家でやりながらということになると、自分1人でできるから、時間設定とか人に拘束される時間って自分でできるじゃない。例えばお昼だけしますとか、午前中だけやりますとか」

3つ目の事例のケース 28 については、進学希望を持っていたが、自営業であった家庭の経済事情が悪化し、両親に「頭を下げて頼まれて」就職した例である。高校卒業時に、「8割方が望んだ所には行けたんじゃないか。9割ぐらいは納まる場所に納まって」というほど就職事情がよく、就職には困らない時期に学校推薦で業界トップの大手企業に就職した。本人は企業や業界の内容などを何も知らず、理解もせずにいる状態であったが、親しい友人に「(一緒に)受けましょうよ」と言われて、一緒に受験したという。しかし、その際、先輩に当該企業を受験するという連絡をしている。そして、先輩から、「何が何でも本社を一番において、自分の住まいと一番近い支店を一番最後に言いなさい」と助言を受けて、そのとおりに実行し、

合格した。さらに、その後は職場で「同期には負けたくない」という負けず嫌いの面もあって、結婚までは大いに職場で奮闘して、今でも良い思い出を残している。

この事例では、言葉の上では求職活動で軽く行動したかのようにいうものの、必要な助言者を求めて行動調整をしているし、高校は進路指導をしっかりしていたとの述懐もある。素直に、周囲を見回し、周囲からの働きかけを無垢な心で受け止めるが、それだけでなく、ここぞという重要な時に適切な助言者を求めることも、それまでの生活の中で自然な形で行うものになっているようである。

残る事例は、ケース5、ケース45である。これらは教師や家族の助言があり、その助言を参考にしつつ異なる対応をしている。ケース5は高校卒業時の担任から「**職業資格を取れる進学先を選ぶように**」と進められ、家庭の経済事情を考慮しつつその助言を採用して進学を決定した。ケース45は、同じように高校卒業時に担任が「**家業を継げるような専門技術を身につけられる進学先を選ぶように**」と勧められたが、それを受け入れなかった。とはいえ、卒業後、短い期間は家業の手伝いをしていた。しかし、家から出て仕事をしたいと思っていたときに、新聞広告で専門学校に進学することで保母資格が取れることを知り、「**結構、堅実派だった**」両親が「**それなら、その分のお金をだすよ**」と言ってくれたことで進学し、実習先の確保でも父親の協力を得るなどして保母になっている。

以上は初職選択のパターン別に特徴的な例を挙げたものである。どれも例外的なものではない。これらを通じて19人の調査対象者が初職を選択するときに行った周囲との関わり方は、その時のおかれた環境と自己の就職への準備性に応じて率直なものであったことが読みとれる。もちろん、この初職選択の行動は今から約30年前に行われた。現在は、職業情報をマス・メディアやインターネットで誰でも入手しやすい。しかし、そうはいつても、また、在学中のアルバイトが一般化したとはいっても、学生・生徒の個人個人が入手している情報量がそれに応じて増加したわけではない。むしろ、20世紀末から21世紀の日本では家庭と職場が物理的にも大きく切り離され、子が親の働く姿を見る機会や親と職業について語り合う機会が少なくなったといわれる。そして、それが原因のひとつとなって、若年者は職業についての理解が不足しがちになっているとの指摘が、かねてからなされているところである。しかも、社会全体の情報量が増えても、個々人の情報処理能力が30年前よりも向上しているとは限らない。そこで、こうした自然体ともいえる職業選択への態度、いいかえれば、未熟ではあるがある意味での率直さが新規学校卒業者に残っていないとはいえない。それがため、進路指導に当たる者はこの若年者の特徴をどのように扱うかが指導・援助の基本になると思われる。

4. 青少年期の家庭

青少年期を過ごした家庭がどのような職業的環境をつくっていたか、あるいは親が子どもの進路や将来の生き方にどのような考えを表明していたかということが、本人の成人後の生き方に影響を及ぼすことが考えられる。そこで、青少年期の家庭の特徴と親の意向及び現時点までの本人の行動でそれに対応する事柄を整理したのが、表 4-3 である。

ただし、女性の場合、結婚で夫との関係が女性の生活様式を大きく変化させ、実家の親との関係にも影響が深く及んでくることが珍しくないと思われる。そのため、女性の長期キャリアについて、青少年期の状況にのみ目を注いで多くの検討を行うことは適切でない可能性がある。したがって、この節では、青少年期の家庭の特徴等として進路選択に関して、調査対象者から聴き取ったことを、ひとまず、その後の本人の行動と対応させて整理した。そして、その整理の結果を踏まえて、長期キャリアの形成については、次節の「5. 結婚と職業」でより丁寧に分析することにした。

<親の意向はあったが、振り返ってみれば親の意向に合わせて選んだわけではない>

女性の進路選択に関する青少年期の家庭の特徴や親の意向をみると、とくに女性特有と思われる事柄もあるし、特有でない事柄もあるようである。

女性特有と思われる事柄とは、結婚前は親元や信頼のおける身内を離れて遠くに就職して欲しくないという親の意向に伝えようとすることや、家事の手伝いやお稽古事を通じて家庭を重視する姿勢を養うよう求められたことなどである。前者の「結婚前は親元や親の目の届く範囲を離れて欲しくない」ということは、21世紀初頭の少子化が進んだ社会では、女性特有とはいえなくなっている。しかし、当時（昭和40年台前半まで）は、女性に対して求められたものとして整理するべきであろう。

女性特有のものではない事柄とは、家庭の経済状況による進学への断念と就職、家業の後継者となること等である。

青少年期の家庭の特徴と対応させて現在の本人の状況を単純にとりだしてみると、表 4-3 からみる限り、① 青少年期の家庭の特徴は新規学卒時の就職には直接的な影響が窺える、また、② 将来の生き方に関する親の意向は現在の本人の状況にかなり反映されているようにみえる。

ただし、これをもって語れることを探そうと急いではないであろう。なぜならば、50歳になった今、現在の生き方を親の意向に合わせて選んだと発言する者はいない。また、過去35年から25年以前の調査を行った時点でも、進路について親の意向があるので悩んでいると語っていた者は何人かいるが、そのときも、子として行動しようとする自分の意志があることを前提に悩んでいた。その時の親の意向について、今それを振り返って自分の行動を評価すると、「自分でそう読みとって」しまっていたのだろう、あるいは、「なにがなんでもということでもなかった」ということになる。

したがって、この表 4-3 からは、親の身の上を思いやって自分らしくやってきたという方が調査対象者の発言を正確に反映するであろう。

たとえば、実質的な跡取りとなって親と同居した者に関しては、親から「なにがなんでも」と青少年期から要請されたり、期待されていたという例はない。いずれも、成人後に自分で姉妹の状況などを判断して決めたといっている。

また、結婚によって親から離れることで精神的拠り所を確保し、それまで子どもは生めないと思こんでいたほど痩せていた自分がやっと「**太れた**」という者がいる。この例は、結婚によって劇的に生活の満足度と幸福感を得たという例であるが、結婚や結婚後の生き方にまで青少年期の家庭の影響が及んでいるとはいっていないし、実際にもそのような痕跡を残す行動はみられない。現在では老いた母親に対して距離をおきながら付き合う知恵を身につけている。

いずれにしても、50 歳までの長期にわたるキャリア形成に対する青少年期の家庭の影響がどのような内容でどの程度の大きさであったのかについては、女性のキャリア形成にきわめて大きな影響を与えている結婚・出産というイベントとの関係を併せてみたうえで次節で分析する。

表 4-3 青少年期の家庭の特徴と現況からみた対応

ケース	青少年期の家庭、親の意向	現況からみた対応
5	そのころ教員試験は、二つは受けられた。地元はだめだった。そのとき姉が東京にいたので、埼玉を受けた。姉の近くでならまあいいかなと思ったし、両親はそういうところだったら、行ってもよるしいということだった。「で、もう一度宮崎県を受け直したんです。」	郷里に戻るための採用試験を受験して、戻る。郷里で結婚
6	姉が2人。当時、みんな家を出て県外で自立。自分も当然そうしたいと思っていた	県外に出て就職。結婚後、夫の都合で郷里に戻った。離婚後は郷里で生活
15	結婚するまで親元にいた。兄2人の3番目の末っ子だった。自分も含めて全員地元で生活している。初職をやめて無職の時に、電話交換の講習をうけた	出産退職したが、姑との関係もあって再就職。電話交換の仕事が続ける
16	小学校の時、両親が離婚、父が男手一つで育ててくれているという感じが強かった。2歳上の姉が家事を取り仕切る。姉が結婚して家を出た	父親をみるため、地元で生活してくれる相手と結婚し、親と同居
19	大学に入ったときに、母も父も就職をさせるつもりはなかったようだ。母が「何かやっておいたほうがいい」と言い、お稽古事として高校からはお茶を習った	結婚に際して家を建ててもらうなど援助されて出発。家計は夫が現金管理をしているので、育児・家事に心を砕いている
26	親も親戚も皆自営。会社勤めは自分が始めてだった。姉がいたが、先に結婚して出た	婿取りとして実家を継いだ
28	一人っ子。母は家業の靴屋のために靴職人と結婚させたかったが、父が、商売の厳しさを味わわせたくないということで、就職をしてサラリーマンと結婚せよといった。高校の時、家庭の経済状況が悪くなり、進学でなく就職して欲しいと親が頭を下げて頼んできた	大企業に就職して、サラリーマンと結婚。その後も家業は継いでいない
32	親は大学を出て教師になることを望んだ。母がホテルに勤務していた関係で高校時代に母が働くホテルでアルバイトを経験。高校時代は動物園の飼育係になりたかったが母に反対されて断念。自分は高校のときから大学院まで精神的にかなり落ち込んでいたと思う。自分に生きる意味がないと思っていた。結婚するまでは体重が40キロを切ることもあるほど痩せていた	大卒時に自分の希望する服飾関係に就職し、離職。その後、母のいたホテルでアルバイトほかをしながら、新設の大学院に入学し、中退。結婚によって、安定し、体調も良くなり、太れたし出産した。子どもが高校生になってからアルバイトで再就職
36	父は兵隊時代に取った免許で獣医、漁師、蜜柑事業経営をやってきた。母は自分が高校の頃までは教師だったが退職した。5人姉弟の4人目。長姉は大阪で教師、次姉は自衛隊、末姉は大阪に出たが体を壊して帰ってきた。大学まで学資を出してもらえる家計ではなかった	県外の姉夫婦に資金援助を受け、奨学金をもらいながら短大に行く。短大在学中は一所懸命教員試験の受験勉強をして教師になる。その後は、通信教育などで上級免許をとる。教師として勤め続けてこられたことを感謝している

	青少年期の家庭、親の意向	現況からみた対応
39	実家は東京隣県だが、山間地域にあった。中学を卒業して実家を離れて同県内の別の地域に就職した後、転職し、結婚前に2つ目の会社を退職した。その時、とくに花嫁修業をするということではなかった。	農家であった婚家の生活に苦勞して馴染み、今は安定した主婦となった
40	高校の時から百貨店でアルバイトをしていた。高校ではアルバイトは原則として禁止されていたが、友達もやっていた。ごく普通に高校生活をしたが、高校を出たら就職するつもりだった	アルバイト先で知り合った夫と結婚。家庭経営を優先して、できる範囲で職業と関わっている
45	実家は縫製関係の自営業。親は、結構、堅実派だった。親はとりあえず家業の手伝いをしてもらいたいようだったが、職業資格を取ることは奨励した。家業では多いときには5人ほど人を使っており、母は人を使うことに気疲れするようだった	専門学校に進学後、保母（保育士）となって現在も就業
46	父は普通の会社員、母は農家をやっていた。教師になりたかったが教員試験に受からなかった	求人誌で就職を探した。会社員と結婚し、子どもが3歳くらいまでは自分の方針とお子子どもべったりで育てた
58	両親が何か勤めていたので卒業して家にいてくれれば助かると母がいった。4人兄弟の4番目。両親も姉も教師で、他の兄姉も自立していた。家でアルバイトのようにピアノを教えていた。父は教職受験の書類を持ってきたが、姉が私の性格だとやっていけないから、やめよと助言した。自分も勉強する気がなかったので受験しなかった	自宅でピアノ講師をし、結婚後もピアノ講師をする
59	実家は建設業関係の自営業。兄がいた。就職する前から父の仕事を手伝っていた	結婚後も実家の手伝いをしたり、自宅の建設に援助を受けるが、夫の不動産業を良く補佐し、アルバイトもしている
60	実家が商売をした。母の考え方は勉強勉強という方向ではなく、いろいろな習い事をしながら、家事を覚えてはどうかということだった	自営業者と結婚。夫の自営業を補佐しながら、家事・育児を大切にしてきた
61	自分は学校の成績がよく、両親の希望の星だった。初職は親のツテで就職した。初職をやめるときは教員試験を受験することが親との約束だった	教員として現在まで就業
65	父親が自営業。手形、小切手などの扱いをみてきた。家と仕事場が一緒だった。自分の希望や言い分は理屈が通っていれば、否という親ではなかった。かえって、じゃ、頑張ればという感じだった	専門職として自立
22	たまたま聴取せず	不明

5. 結婚と職業

女性が結婚や夫との離死別という問題とどのように向き合い、そのなかでどのような生き方を選択してきたかを職業を中心にして整理した。

(1) 結婚と職業

本章の「2. 50歳女性の職業経験とその概要」及び「3. はじめての就職」でみたとおり、調査対象者のうち、職業選択の経緯や学歴、資格に関わらず、結婚や出産を契機にほとんどの者がそれまでの職業を退職している。また、その後の職業との関わり方は、それまでとは異なって自らの希望で正社員かつフルタイム労働という形をとらない傾向がある。この項では、結婚・出産の時期に女性はどのような状況でどのような意識と行動をしたかについてみていくこととする。

とくに、なぜ、女性は結婚・出産を契機にそれまでの職業を退職するのか、あるいは、正規かつフルタイム労働をやめて、それ以外の働き方を選択するのかという2つの問題に焦点を当てて、女性の行動と意識をみていく。職業の面でどのような行動をとったかを中心にみることにし、次のaからdの4点を軸に各事例の状況を把握する。その際、調査対象者が30年近く以前の過去にとった行動及び現在のそれに対する本人の評価を可能な限り忠実にたどり、既婚女性が職業をもつことの是非や社会的意義という観点は入れずに淡々ととらえるようにする。

- a. 結婚・出産をした時に、退職または就業継続についてどのような意識と行動があったか
- b. 初婚家庭の特徴・・・結婚したときにどのような家庭の状況があったか（配偶者以外の同居者の有無、本人や配偶者の実家との関係、本人が記憶している当時の結婚への評価及び結婚の効果）
- c. 配偶者の特徴
- d. 生活全体について配偶者の役割分担の状況と考え方

<結婚・出産と退職>

結婚・出産を理由として退職した者は既婚者18人中13人である。ただし、既婚者18人の中には、雇用労働者でない者が1人いるので、雇用労働者だけであれば総数は17人となる。雇用労働者でない者は、新規学校卒業時からずっと雇用労働者ではない。大手音楽会社との契約関係で、週のうちの数日、ピアノ講師を在宅で行っている者であり、仕事はアルバイトだと自覚しており、自営業の意識はまったくない。

退職した13人のうち、結婚・出産を機に、家業を継いだり、実家の親と同居し、実家で暮らすため、すなわち、実質的な跡取りとなるために退職したものは、3人である。

上記のa～dの軸のうち、aについて、調査対象者は、結婚・出産を機にそれまで就いていた

職業をやめたのか、やめなかったのか、それらの理由はどのようなものであったかを調査対象者ごとに整理したのが次ページからの整理票 *結婚・出産をした時、退職または就業継続についてみられた意識と行動 である。また、調査対象者ごとの b. 初婚家庭の特徴、c. 配偶者の特徴及び d. 生活全体について、配偶者の役割分担の状況と考え方を表 4-4 に整理した。

ケース5 小学校の養護教員を継続している。子どもが小学生時に夫が急病死した。

結婚・出産を理由に退職しようとは考えていなかったが、かといって、どうしても就業継続しようということでもなかった。職業活動と家事・育児の役割を比較すれば、家庭が優先だった。その意識が夫との死別で生活の必要から次のように激変したという。

「(夫が) 亡くなったことによって、やっぱり自分の人生の設計が変わってきたということだと思うんですけど。それまではなんとなく働いていたので、(人生設計は) あまり考えません。K市でそのまま暮らすのかなというような、仕事も嫌になればやめればいかなとか、そういうわりといいかげんな気持ちでおりましたので。それで、やっぱり生活していかないと、何が何でも、嫌でもこの仕事を続けていかないといけないかなというのは、主人が死んでからだと思います。・・・母と同居していたんです、主人の母と。主人が亡くなったので、別な兄が引き取って。母もずっと私の主人、うちの家族と住むつもりでいましたので、母の人生も変わってしまって」

また、生活全体に占める職業のウエートは夫と死別して職業をやめるわけにいかなくなった時とそれ以前では、「明らかに違うと思うんですね、主人がいたときといないときは。違いますよね。家庭のほうが大事だった部分だと思いますね。こっちはもう子供は置いてでもというところは、まあ」という陳述である。

夫と死別後に、姑は義兄と同居するので出ていき、自分は夫の死亡によって得た生命保険による資金で墓参りをしやすい思い出の地に土地を買って自宅を建設した。そして、そこで子どもを育てた。子どもが2人とも成長した今は自分の母が同居している。結局は、全部自分一人で子どもを育てたということかという問いに対して「育てていたかわからないですけど(笑い)」と回答している。これまで周囲の援助はそれなりにあったにしても、実際にはほとんど独力で職業による収入で生活費を得ながら育児その他の家庭責任を全うしてきた。

ケース6 保育園の保育士を結婚退職した。転居し夫の自営業をしばらく手伝うが離婚。

結婚の時は、夫は調理師として雇用労働者だったが、数年後、郷里に帰ってから自営開業をした。その時は、第2子を妊娠中だった。結婚退職の理由はとくに語るものがあるわけではなく、次のような自然の行動のようであった。

「普通にふわっと、気がついたら結婚しとったと」、「結婚して、やめて」、「(子育ては)大変とかはあんまり思わない。子供がいると楽しいですわね、今」

離婚の経緯は、夫がいわゆる悪い仲間と付き合いをして、仕事をしなくなり生活費を出さなくなった上、妻の貯金まで勝手におろし、それについて嘘をつくなどのことから、「もうこれはだめじゃなと思って、もうこちらのほうから縁を切りました」ということである。離婚後は、パートタイムや臨時的就業等さまざまな就業をして自力で子育てをした。

その後は、実家の近くに住んでいたが、基本的には子どもの世話も含めて家庭経営は、「全部」自分がやったという。離婚後も子どものために、出退勤の時間には十分に注意して職業を選択している。

実母が雑貨店を営んでいたこともあるのかもしれないが、実家の両親による家事・育児に対する援助は限られた範囲であったようで、「(両親が)家におると。家は別々にあったんですけど。古家を借りて。保育園のほうに行っていたし」ということであった。また、仕事を探すときは、子どもの保育園の送迎や学校の放課後の世話を支障がないような形で探していたということである。保育士(保母)の資格と経験があるので、再三、臨時やパートタイムで保育園に勤務しているが、その時も子どもの世話や面倒を見るために勤務時間には十分に留意して就業の条件としている。このことについては、また、次のようにも言っている。

「保育園もやっぱり5時ぐらいで終わりますわな、仕事。子供はほかの保育園に行っても、やっぱり5時ぐらい。その帰りに迎えにいった。おじいちゃん、おばあちゃんは全然別だったからですね、棟が。・・・朝、起きたら、その家にじいちゃん、ばあちゃんって遊びに行くような感じですね。(自分が仕事にいつている間は)保育園に行って。一緒にいても、まるっきり押しつけることはなかったですわね、面倒を。そのうち学校に入りだしたら、もうね」

この事例では、仕事そのものに関する親戚の援助についても触れられている。おばの誘いで火災保険の営業の仕事に就いたが、「(ノルマ達成には)おばさんが助けてくれなかったんですよ。そのときに自分の保険をくれていれば、そのままだったんだろうけど。自分でもう・・・。代理店で、いっぱいお客さんは持っていたから、どうってことなかったんですけどね」ということである。他方、母子会から借金をする際には、手続きなど実姉にやってもらっている。身内からの援助は、援助者が日常生活の中で短期間に処理できるなどの負担の少ない事柄については比較的スムーズに受けられているということであろう。

離婚の前後からさまざまな困難を体験し、切り抜けてきた調査対象者であるが、「(今は自立して家を出ている)子供がいるところがやっぱり楽しかったですね。きつかったけどね。子どもが大きくなるまでは、やっぱり大変だったですね。やるときゅうきゅうでお金を稼いで

いたから。そのかわりぜいたくは何にもなかったですからね」という。子どもに向けた努力の過程を積極的に自己評価している。

ケース 15 出産退職である。育児を自分の手であることを最初から決めていたことによる。

結婚当初から、夫の親と同居していたので、途中から主として①“主婦は二人いない”、② 子どもは保育園に預けたい、という 2 つの理由でパートタイムで再就職した。

具体的には次のような経過を辿っている。当時、電話事業は公社の独占事業であり、結婚前にその講習を受けて資格を取得して仕事に就いていた。夫の実家に結婚当初から同居しており、家事は姑と二人で行った。そのため、出産までは電話交換の仕事をしていた。一旦、出産退職したが、① 子どもを保育園に入れたいこと、②一つの家庭に主婦は二人いないこと、という理由から、子どもが 4 歳頃から電話交換の契約社員で再就職した。

再就職の理由は、「まあ、出て行けるといかな。出て行ってると言ったほうがいいのか。・・・そうですね。子供できたらやめようっていうのは最初から。保育園に入園させるのに、市の許可、福祉を通さなければいけないですよ。そのためにパートでも仕事に行こうかなという感じで行き出したんですよ」ということである。

子どもを保育園に入れたかった理由は、「大体同じような年の子が、みんなその時点になったら保育園に行くのでね、家に置いておくよりも、という感じで。そしたら、下があるから、親がいてたら上を見るのも下を見るのも一緒じゃからということ、市の福祉は通らないのでね。で、1人だけでも、お仕事に行っていれば、おばあちゃんが2人見るのは大変だからとってくれやすいというので、一応パートのあれで行こうかということ、行き出したんです」である。

この事例で、②の理由となっていた姑との関係であるが、同居の姑が家事の役割を大きく果たした時期は長くない。勤めだしてから 4、5 年で主婦の座は、「いつの間にか。自然、何かね」明け渡されて、食事作り等の家事は自分が任されるようになっていたという。

働き方としては、夫の厚生年金の配偶者として扶養手当はもらっていないが第 3 号被保険者になっている。そして、そうした自分の職業との関係を「人生をやり直せるんだったら、そうね、どうなんやろう。子育てをやり直せるんだったら、男の子の子育てをもう 1 回やりたいかな。ちょっと失敗したかな、という感じはありますね。・・・自分の中では家庭と仕事のバランスは、結構、家庭のほうを大事にする感じで」と要約している。

ケース 16 結婚退職した。実質的な実家の跡取りとして家に入った形である。

結婚当初から、男手一つで育ててくれた自分の父と同居している。幼稚園教諭として勤務していたが、「結婚ぎりぎりまで」勤めて、「まあ、何としてでもということでもないんですけども、住まないといけなかなみたいに（思って）・・・やっぱり未練は大分ありましたけれども、それでも夫のほうもこちらですのね。そやから、自分の仕事に対する未練はありましたけれども、でも、それはそれで仕方ないかなとそのときは」とって退職している。

子どもが生まれると子どもに食べさせるものに関心が出て生協活動に熱心に参加し、そのほか展示など多様なボランティア活動も経験している。そして、子どもを育てることは難しいことだと振り返り、信頼できる女性仲間や対等の立場にある夫に相談する話題の中心は子育てに関することであった。

職業については、結婚後に「きちりした仕事」に就きたくて将来に備えてパソコン教室に通ったこともあるという。その一方、つぎのように子どもが小さい頃、すなわち、育児期は育児が優先した。それ以後は、老親介護などの家庭内の担わなければならない事柄が発生し、それと職業との優先順位を決めかねているが、結局は、職業は、他の役割を責務として果たしたあとに、自分のための時間に行うものとしての位置づけをしている。

「私は親の面倒は最後まできちりと自分でみたいなのがあるので、そのために親と同居したというのもありますので、親の介護が必要になれば、仕事を続けるかどうかというの。きっと続けるとは思うんですけどもね。姉も近くに住んでいるので、姉と交代しながら見るとは思うんですけども。どんな親でも一人ですから、先行き短い親の面倒はみたいなのとは思っているんですけども。今のところは。でも、もう少し若いころは子供中心でしたけれども、今の生活ではやっぱり仕事中心ですよ。・・・仕事とかも自分の趣味ですよ。趣味というか、自分の時間をわりと優先していますよね」

ケース 19 結婚退職した。家庭を構えるための行動の一環である。

結婚のため退職したが、挙式までは、自分の親に新居を建ててもらおうなどの結婚を控えた準備があった。その間は親元において「時間があるので」、別の仕事をした。いよいよ結婚となったので、その仕事も退職した。結婚後は主婦として家庭経営に専念することは当然のことと認知している。その認知は過去から現在まで変化していない。結婚退職は着々とした結婚準備の内訳の一つである。子どもが高校生になってから、パートタイムで再就職した。仕事にでた理由は、次のように、一人っ子である息子に自立を促すことが目的であり、教育的配慮からであったという。

「外に出てみようと思ったのは、息子が高校2年になりましたし、1人しかおりませんの

でしっかりさせようという意味でも、私が外に出ていて、自分のことを自分でしてもらおうと思って出たんですけれども」

大学の同級生も皆が似たような考えと行動で、これまでずっと来ているという。以下のよう
にそれについて語っているが、職業とボランティア活動や趣味活動とのそれぞれの境界は
はっきりしないものであり、どれも生活上の張り合いや新境地をえるための刺激や手段とし
ても意味をもつものとして考えている。

「私の周りは働いている人はいなかったんです、最初。ところが、あるとき、始終、会っ
ている友達ではなくて、関西のほうにお嫁に行った人が、お医者さまと結婚しているん
ですけども、その彼女が仕事をしだしたと聞いて、『どうして?』って聞いたんです。そう
したら、『うちにずっといるとつまらなくなってきた、仕事を持って、もっと違うところ
にいたい』と言われて、そのときにへえって周りのみんなでびっくりしたんですけれど
も、最近、何かしている人が多くなってきて、例えばボランティアで老人ホームに犬を
連れて行って、なぐさめてあげるというボランティアをやっている友達ですとか、例
えばまるっきり生活には困っていない人なんですけれども、英語版の電話の案内の
仕事をした友達ですとか、ちょこちょこっと、みんな40を過ぎてぐらいから外に出よう
とする人が」

ケース 26 結婚退職した。婿取りして、実家の跡取りとなった。

自営業の実家の跡を継ぎ、夫と実父の間を調整して家業の業種転換を成功させた。25年前
の26歳時に受けた調査では、家業が好きではないので、それを継ぐかどうか悩んでい
っていた。しかし、そのことを指摘されると、「そうだったかしら」と疑問の表情をみせ、
記憶にはないようである。そして、実家を継いで結婚退職した真の理由は、結婚して
実家から離れて暮らすと、親のことが心配で結局は真の幸福を得られないと判断した
ことだと語っている。

中学卒業時にはきわめて成績が良く、県内随一の進学校に進んでいる。短大卒業後に大
企業に入社し、社長秘書として十分な勤めをしていたようである。そして、その会社
で社会的に知名度の高い役員などの立派な上司の姿を見て、その後の自分の生き方に
影響されたという。その後、家業を継承するために婿取りのお見合いを重ねて結婚し
ている。

立派な上司の姿をみて行動の仕方を考えさせられた結果が、現在の自分の生き方や考
え方となり、これまでの自分の人生をしっかりとやってこれた原因のひとつだと自己評
価し、満足度も高い。

「それが転機でもあるんだけど、私の人生観も少し変わったと思うの。女性で言われるま

まに流されても、そこはそここの場で自分の生かせる場所が多分、用意されているんだから、こう決めて、かたくなにここじゃないからダメ、あれじゃないからダメっているよりは、女性はいわれるままに自分ではある時、流されたと思っても、その場その場で自分を生かしていった方が、女性ほうまく生きられて、自分の能力も生かせると思うのね。・・・だから、そういう（会社勤め）経験もあったから、コンビニをやったときにも、今は大変でもずうっとこれをやった方が自分の能力を生かして、ぼんっとまた何かのときに能力を生かせるチャンスは必ずや来るだろうと思ったっていうのもあるんですよね」

職業については、国家資格をとるなどして専門的職業につくことも選択肢としてはあり得たが、自分だけでなく家族などの周囲の人々のことを考慮すると実行できなかったという。それは、能力があったとしても、自分を押し通せないという自分自身の「弱さ」であり、自分の長所であるし、短所でもあったと自己評価している。その意味では「自分の能力の限界」があったと考えている。

ケース 28 結婚退職した。大企業で張り切ってつとめていたが、結婚を機に退職した。

残業もいとわずに仕事と遊びを精一杯楽しんでいたので、どこかで休みたい気持ちがあり、また、親から家事の心得も教えてもらっていなかったのが結婚退職したという。一人娘だが自分の親とは同居していない。

出産後、数年して子どもから手を放せるようになってから、「子供を預けてまでもというのがあったので、アクセサリーをつくる内職を始めたんですね」ということで、内職を始めた。それ以後、内職をやめても、パートタイムやアルバイトの仕事に勤務先を変えながら、ほぼ継続的に就業している。

内職をはじめるとすぐに、数人の主婦を取り仕切るリーダー格となる。その理由は、リーダーでないと自分に合わせて時間を使えないということである。これは家事・育児を的確にこなすためだという。この時間を自分に合わせて調整できるという労働条件を望む態度は、現在まで、職業活動やスポーツ、ボランティア活動のいずれにおいても変わっていない。

仕事は家庭に持ち込まないようにしているが、その理由は、「結果的には子供に当たったりとかってあるので、そうなる主人は『そんなだったら仕事やめちまえ』」ということである。仕事を継続するためには家庭経営を円滑化しておく必要があったということになる。

また、7年ほど前までの数年間には、生命保険の営業をやっていた。そのときは、いつも好成績をあげて毎月表彰されるほどであった。そのためであろうか、上司は自分を中堅幹部に育てようと思っていたようだが、そういう立場になるのが嫌でそれは「逃げ廻って、結局、やめました」という。

その後、すぐにスーパーのパートタイマーになる。その職業選択の理由は、「事務職ってというのは何かちょっと頭を休めたいなという時期だったんですよ。いろいろなことがあって、その時期に主人がちょっとぐあいが悪くなりつつあったしというのがあって、それだったら自転車で通えて、何かあったときにすぐ帰ってこれるところというのを、主人を一番に考えたんですね」ということである。

ちょうどその頃、夫が難病指定にはなっていないが重篤で治療困難な病気に罹った。それ以前に、夫は多額の借金を作って、その後始末を自分も背負ったという状況があった。現在の職業を選んだのは、① そうした家庭の事情、② 病気の夫を世話すること、③ その他の家事、などのさまざまな事情を総合的に考慮した結果であり、それが「病院に自転車で駆けつけられる」地理的条件を満たす場所のスーパー店員であった。

夫については、借金をつくったことを不満にしながらも、「だんなも相談したかったのかもしれないけれども、受け入れてあげられないというか、何かそういうのがあったのかなと反省しちやったりして」と、不満に思う以上に、家庭における自分自身の役割を重くみて自分の内面を整理している。夫は、現在では意識がない状況で延命措置をとらないので、いつ落命するかもしれない病状である。

人生における重大な事柄としては、いろいろな人との出会いなどもあるが、それらの影響を受けながらも夫が回復不可能な病気になったことは特別な意味があると考えている。夫の病気は人生の転機となる最大の事柄として自覚しているが、それでも、子どもの存在に救われて、とにかく自分の人生として次のように受け止めている。

「そういう人の考え方とか、いろいろなのがかみ合わさって、引き金を引いたのが主人の病気ってことだと思いますね。何が具体的にどこでどうして今の人生がこうなったっていうのは位置づけていけないですけども、漠然的ですけども・・・人にすがって生きるということではなくて、人を頼りにするということでもなく、人に頼りにされる自分になりたいな・・・娘がいたからいろいろなことも頑張れてこれたっていうのもあるんですよ。怖いですよ、ほんとうに。ちょっと怖いですよ。親の犠牲にはなってほしくない・・・生きる勇気——生きていくほうがいろいろ問題があつてつらいじゃないですか。子供たちが誇れるような親になりたいなと思うんですよ。胸を張れるような親に」

ケース 32 結婚退職である。複数のアルバイトをつないでいく形だったが結婚でやめた。

高校の時から母親のツテでアルバイトをやっていた。両親とも働いていた。大卒時に一度は希望職種に正社員として就職したが、主として人間関係面で職場不適應になり、退職した。

以後、大学院に進学したが中退するまでアルバイトはやっていた。その後も、今でいうフリーターのような形でアルバイトを続けているうちに結婚。結婚するのでその時のアルバイト先のスナックを退職した。

一旦、専業主婦となり、出産・育児をしたあと、以後は基本的には専業主婦であったが、下の子が高校生になってパートタイムで再就職。現在は銀行の施設のレストランの洗い場で働いている。

この調査対象者においては、結婚（30歳）は、まさに、つぎのような表現で語られる人生を救った出来事としての意味をもっている。

「私が26, 7, 8のときに感じていた『私は一体何のために生きてきたんだろう』というのが、結婚して子供が生まれたときにすべて解決したんですね、私は。今まで無駄に過ごしてきた時間がすべて生かされたというか、子どもを育てること、それから家事をすること。というのは、結婚して気がついたことなんですけど、家庭をつくっていくというのはものすごく大変なことなんだというのが分かって、ただ好きだから結婚したとか、そういうことじゃなくてね。それが一番最初のスタートなんでしょうけれども」

もともと、両親は不仲であり、自分はそれを知っていたという。また、子どもの頃は生徒会長をやっていた経歴あるが、20歳代半ばの青年期から精神的には落ち込んだ状態が続いたと自覚している。しかし、結婚はそうした状態から回復させて精神的安定を得させた出来事であったし、さらには生きる自信を与えてくれたものであったと受け取っている。配偶者を得たことによって自分を肯定してくれる他者の確実な存在を確認したことで幸福を実感して、その幸福を守ろうとする自分を見つめながら前進する気力を取り戻したといえるようである。

結婚生活における自己の役割については、結婚直前にアルバイト先のスナックの客との関わりの中で、一定の回答を得ている。それが結婚を実りあるものとして自覚させる力となっていることは事実とみられる。重要な助言をしてくれたアルバイト先の客との関わりについては、つぎのとおりである。

「お客さんでヤクザの奥さんがいたんですけど、すごく怖いんですね。話していて急に態度が変わるんです。すごく怖い感じなんですけど、結婚が決まって、『私、結婚してやめま
す』と、一応、常連のお客さんたちに話をしたときに、その人が泣いて喜んでくれたんです。そして言った言葉が、『男の人っていうのは、女次第でどうにでも変わるから、あんたはこれから結婚したら、旦那さんのために頑張んなさいね』って言ってくれたんですよ。それは、聞きようによっては古いあれなんですけど、でも、そうじゃなくて、男性には男性の生き方、女性には女性の生き方があって、サポートするのも、別に目立たないかもしれないけれども、

それはそれなりの仕事なんだよということで、私はすごく大きなエールをもらったなと思って。転機といたらそのあたりからかもしれないですね」

いずれにしてもこの事例では、結婚によって幸福を築くようにという助言をしっかり受け止めてそれを実行するという意気込みで結婚退職したものである。

ケース 36 公立小学校の教員で結婚後に就業を継続している。

結婚の時から、夫は、結婚しても妻は仕事をやめない方が良いという考え方であった。その理由は、「おまえはやめたら死ぬとか、生きがいをなくすだろうと。私のこういう勝気な性格を知ってるから、何かに没頭してなければ、きっとふぬけてしまうと」ということであり、子どもが生まれた後は、実の母以上に好きな夫の母や自分の姉が何かと必要なときには子育てや家事を手伝ってくれた。

夫の親にはマンションを購入してもらい、その後、それを資金にして隣県に土地を買って自宅を建設した。それに伴って隣県の公立校の教員採用試験を受けて採用になり、今に至っている。主任にはなったが、現在のところは、教頭試験を受ける予定はない。一度、受けて結果は不合格だったが、しかし、今も校長から推薦はしてもらえる。受験したのは、「よこしまな考えで、嫌らしい考え」が頭をもたげた一瞬だった。教頭になるのは自分の設計図になりから再挑戦はしないとのことである。そして、自分の人生を評価してつぎのようにいっている。

「自分は、振り返ってみたときに、これが私ができる精いっぱいのことやったんです。(短大に) 2年間行かせてもらうだけでも精いっぱいのことだったんです。私には御の字だったんです。よくぞ行かしてもろて、免許とらせてもろた。受かることが報いることやって思ってたから」

ケース 39 結婚退職した。農家の嫁として婚家に同居し農業の手伝いをした。

中学を卒業してすぐ就職している。20歳のときに結婚し、退職。結婚は、「(結婚の) 1カ月前とか、2カ月前ぐらいまで仕事をしていまして・・・そのまま何か夢中でこっちへ嫁いできたという感じですかね」ということであり、自然の成り行きとして結婚退職している。結婚後は、夫の両親と同居。農家だったので、その手伝いをする。出産後も基本的には家業の養蚕を手伝いながら、家事・育児を担当するが、家庭では「白が黒であっても、(舅が白と云えば) やっぱりそれに対して反発するということはなかった」生活であった。

その後、パートタイム就業をするようになるが、その動機は、近所の同年代のお嫁さんた

ちが主婦らしい姿で子どもの面倒をみているのがうらやましく、農業から離れたかったからであるという。最初に、「パートに出たい」と舅夫婦に申し出たときには、「金だったらやるから、出ないでくれ」といわれたという。それでも就業したのは、当時、生活をしていて「自分ではいっぱいいっぱいだったんでしょうね」ということである。

この事例は、養蚕農家の特別な事情があったのであろうが、結婚後にも農業就労をしていたものの、スマートに子育てに専念する主婦らしい生活を希望していた。その希望を実現するための手懸かりとして、家の外に出て働く形の農外就業をしたものである。

その後、いくつかの職場でパートタイマーとして働くが、現在では、職場のパートタイマーのリーダー的存在として行動したり、提案型の仕事ぶりを示すなど熱心に仕事をしている。

とはいえ、農家を守りながら家事を担う「家庭」と自己主張をして自分らしく生きる時間を確保する「職業」という両者の関係は自分の中で現在も明らかなものとして整理されている。それは、最初の再就職時のことを次のように語っていることと基本的には変わっていない。

「年も若かったですし、私が初めてこの近所にパートに出るときに、ものすごく反対されて、でもやっぱり家で、わからないと思いますけど、普通、この辺で私たちと同じ年代のお嫁さんたちが何人か嫁いで来られていますよね。そういう方を見ていて、そういう方は子育てを家でしているわけですよ。サンダルを履いて、エプロンをかけて、ほんとうのお嫁さんという状況を見て、私は農家をやっているわけです。何でこんなに差があるんだろうという、そのときに初めて、多分反発を持ったんだと思うんです。だから、私もそういう状況に置かれたいのに、それは許されないですよ。農家ですから、養蚕があつたりするわけですから。その中で、きっと私もそういう支度をして、子供の面倒を見てという、それが私の頭に多分あつたんだと思うんですよね。だから、それを、周りを見ていて、何で自分はこういうふうに……。一番変わったのが、今まではほんとうに自分の考えとか、思っているものを表に出せない性格が、やっぱりその反発することによって、自分はすごく変わったような気がしますよね。……。もとを質せば、お舅様たちに対する反発心、まずそこで一つ転機が変わっているわけですよ。それで、そこで自分では一応、自分の意思を通したわけですから。本当はここにいなきゃいけないのに、それに反発して出たわけですから、自分で意地もあるわけですよ……。だから、それは農家に対しても、野菜づくりにしても、米づくりにしても、やっぱり今の仕事でどうしてだろうという疑問が、農家にも値する。……。自分の考えで、農家でも仕事でもできるようにはなっていますね」

ケース 40 結婚のため、転職し、転職先を出産退職した。

百貨店を結婚退職した。その理由は、結婚後の家庭で夕食の準備等の家事の役割をきちんとこなすためである。自宅が決まったので結婚したという経過だった。自宅に近い地域に働き口を探して転職。転職の条件は、通勤の近さと、退勤時間が4時15分という早い時間であり、家事との両立を求めたからである。

妊娠中に夫が転勤することになったので、出産前に退職して他県に転居。出産後は子どもが小学校に入ってから、夫の帰宅時間が毎日遅いので「ただ、待っていてもしょうがない」ので、内職を始めた。その後、パートタイムやアルバイトで就業をするが、原則は「無理しない。・・・性格かな。ちゃんとやらなくちゃとか思い詰めるほうじゃないので。やればいいやと」ということである。近所の主婦と同様に「ちょっと手伝いぐらいだったら」という範囲で家庭とのバランスを保っている。それが可能な水道の検針業務を比較的長く続けている。毎日ということではないし、長時間にわたり時間に縛られないからである。

家計のあり方としては、家族の余暇や楽しみのために必要な経費はもともと生活費に含まれるものなので、夫の収入で賄う。そのため、自分がパートで得る収入は、「貯金したり、貯金したりかな」という位置づけである。

ケース 45 結婚・出産後も保育所の保育士として就業継続している。

就業を継続している理由は、夫の意向を汲んだ面と自分の継続意思の両方があり、職場環境としても就業継続が当然となっていたためという。具体的には、「結婚して、でも、仕事を続けてお互いに、主人も仕事を持ってほしいという感じで、私もやめるつもりもなかった。先輩たちがみんなやっぱり働いていたんですね、ほとんどの方が・・・(夫が家事・育児に)自分も協力するからってというお話があったので、それを信じて」という表現で就業継続の動機を説明している。

ただし、出産後の就業継続については、職場の先輩等の前例を参考にして、育児の手助けを身内などの身近な人々から受けないとできないという判断であった。実家の母が一人暮らしだったこともあって、その母と同居した。母には「家事労働の世話」をしてもらい、また、子どもの保育施設への送迎や放課後の世話は夫や母に受け持ってもらった。しかし、今となってはそういう援助がなくともできたかもしれないという考えをもつこともあるという。就業継続の条件はかなり本人にとって有利な状況であったようである。そのあたりの状況を本人は、次のように説明している。

「やっぱりお迎えとかを、2人、保育園時代は、結局、今の家から、私、W区に住んでいたんですけど、お迎え、遅番だと行けないというときは母に来てもらって迎えに行ってもらって家で御飯を食べさせてもらってとか、そういうのが月に何回もあって。早番は6時半ごろ家を出ちゃうんですけど、そういうときは、主人がその頃は、朝は送っていってもらえた

ので何とかなるんですけど、お迎えだけはどうしても主人だけでは間に合わなかったので、母にその都度、家から迎えに行ってもらって、それで私のマンションで見てももらってみたいな生活が、結局、6年間あったものだから。やっぱり小学校に行くと、どうしても鍵っ子になってしまう。学童に入れても鍵っ子になってしまうというのもあったので、それと家が手狭になったのっていうので、実家に、母がひとり暮らしだったものですから、母にお願いして建て直しをして同居をするという形にしたような、そういう経緯がありますね。家庭生活ではそんな感じで。なんで、でも、仕事を続けてこれたのかなというところもあるかな。まあ、頼めなければ頼めないで学童でかぎを持たしてというね。あと地元の保育園の仲間のお母さんたちとやりくりしたということも、もしかしたらあったかもしれないんですけど、私的には随分楽を、同居したことで安心して仕事ができただけかなというのがありますね」

今後の昇進のためには、主査試験に合格する必要があるが、「あんまり受けたくなくて、まだ、受けていない」という、その理由は、組織の管理・経営ということには魅力を感じないということであり、「そういうシステムの中にはまだ魅力はなくて目指してないですね。ひたすら普通の保育士でやって今のところは行こうかな」と考えている。

ケース 46 結婚退職し、転職して、転職先を出産退職した。

夫婦で同じ会社で働くことが認められない風土の会社で社内結婚したので、退職し転職。その後、第二の職場で出産を近くに控えて退職。出産退職の理由は、育児休業制度の利用も可能であったが、本人が育児を自分の手で行うことを優先したためである。次のような表現でそれを述べている。

「私の考えは、子供を預けてまで仕事をしたいとは思わなかったんです。できれば、子供は自分で3歳ぐらいまでべったりくっついてみたいという考えがあったんです」

「だから、私がそこで、そのときはこのまま育児休暇とかをとって、やろうかなとふと思ったんだけど、子供べったりでいたいという前々からの自分の主義というのか、そういうのがあったから、ちょっとは考えたけれども、先輩方に倣ってやめたんです」

そして、実際に、退職後は下の子が小学生になるまでの15年間は専業主婦として家事・育児に専念した。ただし、職種が異なっていれば異なった行動を取った可能性があることを感じており、「例えば、学校の先生になっていれば、そういうことはできなかったと思うんですけども」ともいっている。この理由がなんであるのか、たとえば、その職業がもたらす経済的効果や社会的評価なのか、一般民間企業との労働条件との差というようなものかは、定かには聴き取っていない。「そういうことはできなかった」という表現には微妙な響きがあ

る。

再就職の当初の条件は、勤務時間の身近さであった。下の子が中学校に入るとフルタイムで働きたいと希望するようになり、その条件にあった会社を探している。もちろん、定時の出退勤時間が守られることが重要で、残業は考えていない。夫は「勤めてくれとか、やめてくれとか」ということは一切いわないので、本人の判断で行動している。

現在の職業についての考え方は、自身が子どもに次のとおりに語っているように、職業での成功と満足は必ずしも社会的地位との関係を意識させるものではない。とくに、女性の働き方は自分自身のこれまでの行動を積極的に肯定するものであるといえよう。

「そういう意味で、ほんとはずっと続けていくのがよかったのかもしれないけれども、どうだろうか。ただ、私は子供たちにもよく言うんだけど、仕事というのは、人生の中で一つのやりがいというか、専業主婦という職業もあるけれども、自分を高めるというか、そういうのも、仕事というのは大事だよと。」

女性の社会的自立と職業の関係については、以下のように“手に職をつける”ことの有利さを説くと同時に、その職業も含めて職業を女性が育児中も継続させるかどうかについては、状況に応じた選択を重視していることが読みとれよう。前述したが、学校の先生になっていれば、出産退職はできなかったという言葉を検討すると、全体としては女性の就業継続については状況に応じた選択が重視されたとみられる。

「今ちょうど娘が大学に入ったところで、これから就職活動もやるんだけど、何になりたいかと悩んでいるところなんです。だから、そういう話のときに、お母さんはこういうふうにしてやってきたけれども、できれば手に職をつけたほうがいいよ・・・手に職があれば一番いいとは思いますが、手に職がなくても、事務所とか何かでも、パソコンとか、これからの時代、そういうのは大いに身につけていかなければならないことだから、そういう中で、社会の一員としてちゃんとやっていけるように、自分の身につけておきなさいと。それは言うてはあるんです。たとえそれが補助的な仕事であっても、いずれ、私がこれにかかわっているから、この仕事ができるんだぐらいの気持ちになってやりなさいとはいつているんです」

ケース 58 雇用労働者ではない。自宅でピアノを教えていたのを結婚したのでやめた。

結婚してピアノ講師をやめた理由は、かねてからの自分の希望であった。つぎのように結婚後に仕事を離れるのは予定の行動であった。

「自分は学生のとときか結婚するときには、仕事はしたくないほうだったんですよ、自分はそんなに。やめられると思って結婚したんですから。今の生活がこれで変わるかな、変わるかなというか」

さらに、女性であるかどうかとは別に、自分自身の性格や行動の特徴として長く職業を継続することについては自ら懐疑的である。両親も姉も教員で長期に就業を継続している家庭環境にあるものの、自分自身の職業との関わりは、「(もともと)フリーターみたいな感じだったかもしれない」し、教員になったとしても「やめていたと思う」と語る。

「本当は何かの仕事、会社にと、私は姉とか見ると教員になってちゃんとかやってやって、私はいいかげんちゃんとかつかないし、何かそういうのであったんですね。でも、多分私はそうなったとしてもならなかったかもしれないけれども、なれたとしても多分私はやめていたと思う。言われると、ああ、そうかなと。だから、これが私にはよかった。私にとっては家庭が本当に」

その後、夫の海外転勤に同行するが、出産・育児のために自分だけ実家に戻ったところ、頼まれてピアノ講師を再開。以後、夫の転勤や単身赴任のそれぞれの事情のなかで断続的に自宅でピアノ講師をする。夫の実家の敷地内に住んでからは十数年間継続している。継続の理由は、「(実の)姉がやっぱり音楽なんですね。それで、姉のほうがバリバリしているので、協力者がいるというか、教えるのも姉がいたり、(夫の)実家のお嫁さんがいたり・・・協力してくれるところもあるので、家で自分でできるというか、だから、わりと発表会もおじいちゃん、おばあちゃんとかも楽しみにしていて、それも何か親孝行かなと」というように、① 自宅でできること、② 自分のペースが守れること、③ 協力者がいること、をあげている。このうち、雇用労働で就業継続している者との違いは、いうまでもなく①である。

さらに、夫の弟一家と同じ敷地内に住んでおり、弟嫁が外に働きに出ているので、その子ども(甥)の面倒を姑と分担してみたことがあるとのことである。夫は単身赴任を続けている。十数年間にわたって夫の親兄弟との付き合いや相互援助関係のなかで子育てをしてきている。育児のあり方については、もともと家で自分の子を育てており、甥の世話と重なって悩んだことがある。その時は、実家の親から自分の手で自分の子を育てられることは幸せなことだとの助言を得て、そのとおりで納得しようとし、今では納得している。具体的にはつぎのようなことであった。

「いいんだよ。自分で育てられるんだ、自分の子供は自分で育ててるんだからと実家の親に

言われて、ああ、そうかなと。だから、何年たったときに親もそうか、ああ、そうかもなど。自分の子供を自分が育てられるんだからいいんだよと言われて、ああ、そうかなとも思うし、主人のほうの両親のこともいい親だねとか言ってくれと、ああ、そうかなって。いろいろ大変なことあるけれども、ああ、そうかなというか」

現在は、婚家にすっかり馴染んで、ものの考え方など婚家の方に似てきていると自覚している。また、これまでの周囲に気を遣う生活が自分自身の人間としての成長のもとになったといっている。老年になった実家の母も自分を頼って甘えてくる。

ケース 59 スカウトされて就職した職場を結婚退職した。

結婚後、専業主婦に一旦はなる。本人が曰く、いわゆる“できちゃった婚”だが、退職の直接の理由は結婚。しかし、出産後には、実家が自営業であったことから早期に実家の手伝いを手始めにパート就労的な就業を開始している。この事例の場合は、もともと活動的なタイプで職業として実社会で働くことが生活を快適に過ごすことに役立っている傾向がある。ただし、基本としては、つぎのように、職業よりも家庭優先、育児責任を優先する形である。

「もうそれからは子育てと。まあ、ジーツとしてらんないからね。親のほう手伝ったりして何だかんだやって。それで4年おきに子供だから、結構なんか大変。・・・(アルバイトやパートなどいろいろなことをいつも)一緒ですね、並行してます。損だったら、きっとやってない、どっちかやめてると思う。多分、流れで。うん。そりゃ、途中は頭にきたりとかいろんなことありますけど、要は子供を育てなきゃいけないという責任感は、昔はありましたよね。今の人みたいに子供を虐待するとか、殺してやろうとか、そんなこと考えたこともないじゃないですか。そのうち楽になるわって思っていたら、大きくなったほうが大変。子供は小さいうちのが楽だった。うん、その形ですね。だから、仕事にもそんなに責任がある仕事じゃないじゃないですか。できるときはできて、やらないときはやらないような仕事だから、手伝いでも。だからこなせてきたんじゃないかなって。ただやっぱり、何にもしないというのは考えられないかな」

育児期にも何らかの職業活動を続けてきた理由としては、生活にリズムを付けて行動的な自分自身の中にハリをもたせるということがあるようである。その点を、本人は以下のように率直かつ明快に表現している。

「家事仕事は洗濯物しようと思えば一日洗濯物できますし、片づけものって言えば一日片

づけ、毎日片づけしたって終わらないんですよ。でも、どっかで見切らないといけない部分があるじゃないですか。そしたらやっぱり、仕事をする時間があって、子育てがあって、家事があってって分けたほうが自分の中でもメリハリがつく」

ケース 60 結婚退職した。以後、夫の自営業の手伝いはしているが専業主婦を自認。

結婚後は、ずっと専業主婦であったことを主張している。夫婦の共通の了解として、家庭経営の責任、とくに育児を任されてきた。ただし、結婚以来、形式的には自営者の経営者の一員である、実際には、銀行との取引の手続きを手伝ったり、従業員の日常の生活管理や各種相談に応じている。結婚退職は、とくに理由を挙げるほどのこともなく、“トントン拍子に”すすんだ縁談の結末の形で自然に進んだものとみている。

家庭経営と育児の責任については、つぎのような言い方で自己の責任と役割の重大さを語っており、整然とした意識の整理がある。

「(忙しい夫と) 合わせようとする、私がやりたいことをやりだすと、どちらかといえばワンマンではないんですけど、生活の面とかそういうことは自分に任せてほしいけど、何かそういうところでは自分に合わせてほしいというようなところがあった人だし。すごい頑張って働いているということのサポートをやっていきたいというのが強かったので。そこで私は私みたいところでいくと。大概、何ていうのかしら。いろいろな人を見て、そこで分岐点っていうんですか、夫婦の仲がさめてきたりとか。何かその辺がすごく感じましたので、どちらかに」

「子育てというのは、主人の考え方では私が全部ある程度主導権っていうんですか、それは私に任せるので。そういうような形だったんですよ、うちの場合というのは。でも男の子3人でしたので、仕事もサポート的に手伝いながら子育てのほうに専念するという形をとりました」

就業や趣味を追求せずに家庭を優先する理由については、結局は、家庭の一員としての自分が楽に穏やかに生きる方策であるといっており、育児は自分の責任であり、自分の手で子育てをすることは幸福だと考えて納得している。いずれにしても、これまでの生き方は、はっきりとした自己選択であり、結果に成功を得ていることが主張の要点である。

「大事にというか、しないと、自分がいづらくなりますよね。やっぱり家の中で角つき合わせているというのは絶対できない性格ですし。やっぱり居心地がいいようにしたいというのはありますから。・・・単純に言えば。自分の首を絞めないようにしようというか。(笑)・・・

やっぱり自分で責任を持って育てられるということを幸せやと思わなあかんよって言われた方はいて。それは思いましたね。よくても悪くても自分の責任」

ケース 61 高校教員を継続している。

結婚したら退職する予定であったが、① 夫の方針と、② 労働条件が良いことが理由で継続し、出産までは勤めることにした。ところが出産して、育児休業をとっていると③ 家にもつまらないと思うようになったことと、④ 両親の援助が受けられるという状況があったので職場復帰することにした。以後、就業継続している。上記①から④の4つの理由については、つぎのように簡明に説明されている。

「結婚したらやめられるかなとか、教員同士ではやめられへんから、教員同士はみんな続けてるから、サラリーマンと結婚したらいいやと思って、サラリーマンを紹介してもらって結婚したんですけどね。妙に理解がある人で、女性も経済的に自立していたほうが良いという人なんので、えーっとか思って、教師だったら続けられるから、保障もあるし、ちょっと子供が生まれるまでは働いとこかなと思って・・・そして3月から、ちょうど育児休暇が1年間もらえるという年やったんです。・・・3月やし、1年間でちょうどきりがいいかなと、1年で26歳からまた再開。そこでやめとけばよかったのに、やっぱり何か家にいるのはつまらんとか思って、それで子供を1歳から預けられたので保育園に預けて、両親も近いところに住んでましたので、送り迎えとかやってくれたから、じゃ、やってみようかということで、ずっとそれ以来続けているんですけども」

現在は、主任試験を受ける気持ちはない。その理由は、主任等の管理職は現場から離れた感じがするという、世渡り上手に立ち回って管理職になるのは主義に合わない「片腹痛いこと」だと考えている。学校経営全体の大変さを管理職として担わないかわりに、担任という現場の大変な仕事を自分がやろうと思って実行しているということである。現場の醍醐味を味わっていると自覚している。

ケース 65 未婚者である。中学校時代から希望していた鍼灸師をしている。

中学時代から鍼灸師を希望した大きな理由は、① 女性が経済的に自立できること、② 結婚しても継続できること、の2つである。その背景に、③ おばが鍼灸師として独立して成功している姿があり、④ 自営業を営む実家の両親が理屈の通る主張は通すという態度・方針で自分を育ててくれたということであった。職業選択に関する条件と家庭環境を青少年期から上記①から④のように実に明確に意識していた。

これまではふさわしい相手に巡り会うことがなかったので未婚であり、職業的には技能を

向上させて成功している。やり残したことは、結婚と子どもを得ることであるが、今後も、より一層の職業上の自己啓発と熟練を遂げて、職業を通じて社会に貢献しようとする意識がある。現在、出産・育児を想定しえない年齢になっているので、結婚の時期を焦る必要がなくなったと状況を分析している。今後、そうした自分にふさわしい好ましい人物と出会うことがあれば結婚することもあると考えている。

女性の就業問題に関しては、新規就職時に、結婚による家事・出産・育児等で自己が担う役割を想定して、それを職業活動と調和させる方向で、職業を選んでいることが注目される。専門技術を専門学校で学びながら、併行して入学した大学は法学部である。その理由は、法治国家で生きるための知識を学んだということなので、結婚と職業との調和等には直接の関わりはなく、基礎教養のためである。未婚者であることで、かえって、結婚と職業との関係に係る概念を浮き彫りにしてくれている面がある。

「私、最初はね、鍼灸というのは、だから純粹に生活の糧。で、うちのおばがやっていたんですよ。おばさんはすごく腕がいい人でね。すごくはやっていてね。多分、大分財を成したと思うんですよ。それを見ているから、おばさんの職業はいいなあって。例え結婚したとしても、結構自分の、例えば家でやりながらということになると、自分1人でできるから、時間設定とか人に拘束される時間って自分でできるじゃない。例えばお昼だけしますとか、午前中だけやりますとか。だからそういう意味でもね。例え結婚しても続けられる。自分のペースの時間配分ができる仕事というので」

「(やり残したことは) 結婚もね。結婚とか子どもとかという・・・めぐり合う場がないですよ。だから。そうそう。だから私 60 になっても 70 になってもそういう人とめぐり会ったら、それで一緒になったらいいと思っているから。だから出産年齢、限界年齢はちょっと考えたけれども、周りにそういう人がいないからまあいいやって。それを乗り切っちゃいました。それを過ぎるといつだって一緒だから。あまり別に焦りもしないし、なるがままで」

ケース 22 出産退職した。育児休業は可能だったが、家庭を優先して退職。

結婚後の 10 年以上勤めていたが、出産を機に退職した。その理由は、① IT 機器が導入され、それを使ったためか首や肩に疲れでたこと、② 大企業だったが会社が業界不況で赤字経営のときだったので赤字経理に嫌気がさしたこと、③ 制度的にも社内環境からも勤めを継続することはできたが、子どもの面倒を自分の母にも夫の母にも頼めない状況だったこと、という 3 点である。

しかし、同時に職業と家事・育児を比較した場合の選択の優先順にははっきりしており、「仕事か家庭かの選択については、女性ということもあって迷わず家庭を選んだ」と

いる。

退職した会社には14年間勤務し、結婚してからも11年間勤めている。会社に対しては取引先との連絡などいろいろな経験をさせてもらって、仕事を通じて人間的にも成長させてもらったと思っている。そのほか、経理の勉強や生花のお稽古事をさせてもらって感謝しているので、退職理由は、会社の制度や慣行、風土といったものではなく、まさに自発的な理由である。下の子が小学校に入ると職業活動を再開してアルバイト就業をするが、子どもの怪我の面倒や親の世話をする必要がでて退職した。その後も、就職しない理由は、老親の介護で、ケア・マネージャーや役所との交渉も自分がしないといけないことから、「**時間が不定期になるので、それにあった仕事はみつけれない**」とのことである。まずは、家族の世話などの家庭での役割をこなすことが、すべてに先行して取り組むべき事柄になっている。

表 4-4 結婚・出産をした時、退職または就業継続についてみられた意識と行動

ケース	初婚家庭の特徴	妻からみた夫の特徴と夫婦の役割分担
5	同県人と結婚、夫の母と同居。(夫の勤務地で)そのまま暮らすのかと思っていたし、仕事も嫌になればやめればいいかと「わりといいかげんな気持ち」でいた	市役所勤務、技術職、1級建築士。妻が30歳代半ばで急に病死
6	同県人と他県で結婚。退職して団地生活。その後、郷里に帰って、夫が総菜店に勤務後、出店し自営。	高校同級生の調理師。その後、郷里で独立開業を目指したが、金銭的な問題がもとで離婚。離婚前は夫が勤め人の頃は妻は専業主婦であり、自営のときは店を手伝う立場だった
15	結婚時から夫の両親と同居。高校のときからずっと付き合っていた。	大手自動車会社の塗装、バッカーを仕事にしている。高校の同級生。話が得意でない無口の方だ。必ず定時に帰ってくる。家庭を大切にしていると感じたが、子育ては妻にかませるという方針
16	結婚のときから自分の父親と実家で暮らしている。(3人姉妹の)真ん中だが、(姉に)嫁がれてしまったので、2番目としては親と暮らさなければいけないと思っていた。また、たまたま地元の実家に入ってくれる人がいて結婚。生活は、「自分でそやなと思ったら、自分ですぐその場で決めるほうなんですよ」ということでうまくやってきている	地元出身。大手石油会社に勤務。これまで転職はない。専業主婦が基本だが、夫とは対等だと見ているので、夫からは人生の先輩としてアドバイスをもらう。
19	結婚した後、新居を親に建ててもらった。その間は実家に同居	高校の同級生。サラリーマン。育児では細かいことは自分が気を付けて、夫は「わりと大きなところから判断しているようなところがあって私と違う面で見聞を言ってくれる。結婚してからずっと、夫から生活費としてお金を受け取り、銀行のキャッシュカードを自分が使うことはない
26	婿取りのため当初は親と同居。酒屋経営。その後、親の酒屋をコンビニに転換し、独立して別居。実父と夫との関係が難しかった。ただし、自分の親の所有地に家を建てたもので、今も道路を挟んで向き合う近さに住んでいる	婿取り。自分の実家の酒屋で家事従業の後、自分とコンビニエンス・ストアの共同経営者。開業前は家業での活躍の場がなくて、ゴルフなどに時間を使っていた。しかし、それで愚痴をいっていたわけではない。しかし、自分は察していた。開業の際には自分を頼りにしていた。夫と父の間に入って「もう離婚か、コンビニかっていう感じ」だったが、自分の決断と行動力で開業。最終的には父が納得して譲ってくれた。夫が経営マネジメントの中核的な部分を担い、自分はその他のことをする。たとえば、従業員の採用は夫がやるが教育は自分が担当する、町会や組合の役員は夫がするが当番などの実質的な仕事は自分がする。ただし、朝6時から夜9時頃までは自分が手伝うが、深夜は夫が担当するなどの分担がある
28	自分の上司が引き合わせてくれて結婚したので、結婚後もその上司と家族ぐるみでつきあった。結婚で退職するときは、送別会を何回もやってもらい職場で祝福され、惜しまれた。一人娘だが、親とは別居して専業主婦になる。今も親とは別居	8歳年上のサラリーマン。取引先に勤めており、自分の上司が引き合わせてくれた。7年前(自分が42歳頃、夫が50歳頃)に夫が重篤な病気を発病、今は意識がない。延命措置は執らないつもりだ
32	アルバイトをやめて結婚した。結婚してから精神的に安定して太った。それまでは体重が38キロとか、40キロ切っていたときもあって太れなかった。「そんなに格好つけなくても、肩ひじ張らなくても主人に認めてもらえたというのがあった」、「“大事に思ってくれているんだ”っていうので自信がついた」と思い子どもの頃のようにのびのびした。 子どもが生まれてからは、「お家が一番大事。仕事が終わると走るみたいにして帰ってきて、子供をお風呂に入れてくれたり、何でもしてくれる」という生活だった	建築関係の会社員。年下。冷たい人かと思ったら、人の意見を尊重してくれて、家庭を大切にしてくれるマイホームパパだった。自分の見たことがないものを夫がみせてくれた。夫は、すごく単純に明快に、ぼんと言葉にする人で、「子供と夫婦と、かちっと家にいるもんだという感じの人」で、自分が迷っているときに助言してくれる

	初婚家庭の特徴	妻からみた夫の特徴と夫婦の役割分担
36	夫の父親に分譲マンションを購入してもらい住む。その後、それを売って土地を買い持ち家を建てる。家を建てたのでその近くに勤めるため、県外の学校に移る	市役所勤め。おとなしいんですよ。だから、おとなしい人柄で、「私の言うことを全部吸収してくれるタイプ」である。出勤前に、子どもを朝、預け先に送るのは夫がしてくれた
39	夫の実家で舅夫婦と同居。大きな養蚕農家で舅夫婦に仕える。夫は新婚当時は会社勤めで、家業の農業はちょっと手伝う程度。農業は自分と舅夫婦でやった。それまでと180度、生活環境が変わった。やっていけるのかと不安だった。その後、すぐ子供ができて、自分のことなどなりふり構わずやってきた。舅様に仕えて、白が黒であってもそれに対して反発するということはなかった生活だった	5歳半年上。新婚当時はダンプカーの雇われ運転手、その後、自営のダンプカー運転手→車エンジン解体の会社員→車内装関係の会社員。夫は相談する相手ではない。結婚当初の自分の辛さは多分、幾らかなりともわかっていると思うが、それに対してしてくれるということはなかった。本当に耐えるだけだったが、今まで自分が背負ってきた農業についても、今は、夫も少しやろうとしている。このままの状態で行ければよいだろう
40	子どもが生まれるまでは共稼ぎ。夫は住むところが決まったから結婚しようということであり、自分は結婚するために終業時間が早い会社に転職した。	自分の職場に派遣されていた学生アルバイトだった。卒業後にコンピュータ関係の会社に就職したので結婚。2歳年上。会社員、現在は単身赴任で週末に帰宅する。夫婦仲は、「いいんだか、主人が我慢しているんだかわからないけど」ずっと、うまくいっている。自分は専業主婦が基本であり、パートなどの自分の収入を趣味に使うこともたまにあるが、夫の収入は家族みんなのものだから、それはみんなです。自分の働いたものは自分のもので貯金する。夫婦げんかは自分が1人で怒っていて、そのうち何故いかなかったかわからなくなるという状況。しかし、夫は家事など何もしていない。帰宅すれば文句を言う。とはいっても、気分転換に御飯つくったりするのは好きで高校生の子供の弁当を作って学校にもたせることもあった
45	親とは別居して、夫と自分の両方が通勤し易いところに住居を決めた。その後、実家を立て直して母と同居。子どもができてからは夫と実母に助けられた	生協職員。夫の姉の紹介で結婚。主人も仕事を持ってほしいという感じだった。職場の先輩たちがほとんど結婚後も働いていたので、自分もやめるつもりがなかった。夫は、共稼ぎなので家事を手伝ってくれて、助けられた
46	同じ会社に夫婦が共にいるのはよくないという会社の方針があったので、3年間勤めた会社だったが辞めて自分が転職した。転職先には子どもが生まれるまで6年間勤めた。結婚5年の頃、自宅を自分の実家の土地の上に新築した時に、夫の姉（13歳年上で独身）と同居。その姉が60歳近くになって結婚するまでの18年間同居していた。同居を始めるときは、そういうものかと思ってとくにどうとは思わなかったが、実際の同居は人生の試練だった	他県人だが、次男なのでマスオさん風に自分の実家の近くに住む。サラリーマンで4回ほど引き抜かれるなどして転職を経験。今は薬品販売会社勤務。妻には勤めるなども勤めてくれともいわない。会社人間で、マイホームパパではない。育児は自分にまかせきりで、子どもとあまり関わらない。家では何もしないし、何もいわないのでかえってうるさくなくてよい
58	農家の長男。夫は会社員で海外転勤が多く、新婚ですぐイラクへいった。湾岸戦争の頃だった。それまでやっていたピアノの講師はやめた。子どもが生まれるので病院もないような所だったため夫を残して帰国し、自分の実家で出産。その後タイへ夫が転勤。下の子の出産も日本でしたがすぐにタイへいった。その後、自分と子どもが日本に帰国し、夫だけが海外の任地にいた。ピアノ講師を再開した。現在は、国内に転勤になったが、単身赴任している。夫の実家の敷地内に自宅があり、同じ敷地内の夫の弟（共稼ぎ）の子どもの面倒をみていたことがある	会社員。海外転勤と海外出張が多く、家を空けることが多い。自分一人でやってきたという感じ

	初婚家庭の特徴	妻からみた夫の特徴と夫婦の役割分担
59	結婚し退職した。結婚は今にいう「できちゃった婚」だった。退職後すぐに、家にいるだけの生活は合わないので、実家の自営業の手伝いをしたり、アルバイトやパートの勤めに出た。当時は夫は会社員だった。1日の生活を仕事をする時間、子育て、家事と分けたほうが自分の中でもメリハリがつく。専業主婦は疲れるものだ。最初はアパートに暮らしたが、実家が不動産業なので、その関係から実家の土地に自宅を購入した。ローンを組んだが税金などは実家から面倒をみてもらっている。十数年後に夫が独立開業した。自分は他社でパート等をして小遣いを得ながら経営者の一人として夫の自営業を手伝っている	リゾート開発会社の社員のとき、社内結婚。今は不動産業を独立開業している。夫が経営の重要な部分をやり、夫がいうように仕事を処理するが、とはいえ、自分は自分の判断で行動している。家庭内では、夫には「私の好きなことをさせていえばいいだけです」、「うちに旦那さん（を相手に）だったら勝てる自信ありますもん」ということで、大きな問題以外は自分が判断し、処理している
60	夫は結婚前に父親が亡くなって家業を継ぎ、一人で頑張っていた。ずっと仕事人間だった。夫の母はしっかりもので、別居している。姑は自立した人なので深くつきあわない方が良い。結婚当初から、夫婦で話し合いができるし、余暇などでは、夫婦単位で行動することが多い	自営業（農機具販売）。高校時代の顔見知りで叔父の税理士事務所の得意先（顧問先）の会社を経営。父親から家業を継いだ仕事人間。業界では先駆者のような形で新しい事業経営に取り組んできた。無借金経営になりたいという夢をもって、ひたすら頑張って実現した。夫婦仲はよいと思う。「いろいろカーッて悩んだときに、主人がわりかしうろろしない人で。あ、よかったみたいな感じで」夫婦の話し合いができる。夫婦単位で行動するという考え。今はそれがシンプルで、非常に良いと感じている。職業として事業は夫が行い、自分は主婦として家庭経営（家事と育児）を行い、事業については夫から必要とされるものについて手伝う。子育ては、自分が主導権をもち、家業をサポート的に手伝いながら子育てに専念するという形をとった。大きな問題があるときは、ある時点までは自分が子供と接していて、その後、夫にバトンタッチして解決し、夫に対して子どもから感謝させる。「外見からいい奥さんって聞こえますけど、私が楽なんですわね。そういうところまで、あと任せればいいんですから・・・うまくいけばそれでいいんです」という役割分担をしている
61	結婚に際して、夫は「妙に理解がある人」で、女性も経済的に自立していたほうが良いという考えだった。「えーっとか思って、教師だったら続けられるから、保障もあるし」と思って就業継続。どちらの親とも同居していないが、子どもが小さいときは一時自分の実家に毎週預かってもらったことがある。わりと話はよくする夫婦なので、友達のようなところがある	会社員。5歳年上。紹介があつて、結婚した。猛烈社員型。しかし、悩みがあるときの相談相手。単身赴任もあっさりこなした。自分が病気のときは休んで出張先まで連れに来てくれたり、精神的に落ち込んだ時には、単身赴任中でもよく支えてくれた。若いときは猛烈に忙しい時代だったので夫は帰宅時間が遅くて、実際には家事に協力することなどできなかった。家事育児は自分が抱えたが、一時は自分の両親の世話になった
65	未婚	
22	結婚後の共稼ぎは夫の理解があつたのでできた。出産後も勤め続けることができる会社だった。しかし、ちょうどIT化などで疲れの症状を自覚し、会社が赤字で仕事に嫌気がさしていたこと、親には育児を頼めない状況だったので退職して専業主婦になる（勤続14年、34歳）	高校時代から交際していた。共稼ぎは夫の理解があつたのでできた。退職後、下の子が小学校に入る頃になってアルバイトを再開したが、子どもの怪我、親の介護、看取りが次々と生じて、介護等の役割を自分が担うので、また、専業主婦となっている

<結婚・出産退職をした理由、しなかった理由>

整理票 *結婚・出産をした時、退職または就業継続についてみられた意識と行動 と表 4-3 から、女性が結婚・出産を機に退職した理由としなかった理由をまとめると以下のとおりである。

○ 結婚・出産退職をした理由

第一に、全員に共通するのは、自分の手で育児をしようと考えていたことである。それは「子どもを預けてまでも」というような言い方で表される場合もあるが、もともと育児は職業から離れて専念して行うという意思がある。

第二に、これは全員共通ではないが、育児を手助けしてくれる者が身近に存在しないということである。ただし、就業中に乳幼児を預ける手段は、その質を問わなければまったくないわけではない。問題となっているのは、育児手段が皆無であるということではなく、親身になって我が子の面倒をみってくれる母親や姑、あるいは姉妹などの女性の身内がないことである。育児を担当する者の資格は自分のかわりになりうる身内の信頼性である。

ところが、夫との離死別があれば生活費を確保する等の生活上の就業の必要性が格段に高まる。すると、子どもを預ける手段を選んでいる余裕が失われ、この第二の点は退職をする理由としての重さが急速に失われざるを得ない。

第三に、何人かはやめられては困るといほどの仕事をしていないということもあがる者がいる。だが、これについては、そういう仕事だから子育てしながらやってこられたという者（ケース 59）がいるし、女性はいつか活躍する場を得られるのだからやめることも良いのだという者（ケース 26）もいる。これらの意見をもつケース 59 もケース 26 も自営業者の妻であり役員であって、実質的にも事業の共同経営者といってよい働き方をしている。そして、その他に職業活動や地域活動をしているし、そのうえ、従業員管理などを通じて多くの女性の生き方に接してきている人々である。この人々の意見の解釈は慎重にする必要があるであろう。

第四に、実質的に実家の跡を継いで親の面倒をみようという考えをもっている場合は、結婚相手を選んで結婚し、退職している。

第五に、第一及び第二の理由があれば、育児休業制度等の会社の制度の有無や活用の可能性とも関係なく退職している。

○ 結婚・出産で退職しなかった理由

他方、結婚・出産を機に退職しなかった理由は、退職した理由を完全に裏返したものとはいえない。全員が自分の手で育児をしようと考えていなかったとはいえない。ただし、就業を中断して育児に専念しようと考えていたわけでないという特長がある。

ケース 61 のように、「夫が妙に理解がある人で」あり、女性も仕事をもって経済的に自立することを望んだことから、労働条件の良い職場であることを理由に、強い意志ではないが退職しなければならない特段のことがないという流れで継続したという例がある。ところが、その一方で、育児に関して職場の条件自体は整っていたという者で退職した者や、身近に育児援助者になりうる女性の身内がいたとしても退職している者はいる。やはり、就業を継続するか、中断するかは女性自身の意思の違いによるところがある。

これら就業継続者の客観的に把握できる条件をあげると、共通の特長は勤務先の性格と職種にあるといえる。今回の調査で結婚・出産が理由となって退職せず、その後も 50 歳の現在まで就業を継続している者の共通の職業は、公立の保育・教育機関の保育士または教員という専門職であった。幼児や生徒・学生を保育、養護、教育する立場の専門職である。

とはいっても、調査対象者のなかに保育士であっても出産退職した者がいるし、就業継続した者の同じ職場にも退職者がいたという。したがって、公立機関の専門職であることが、前記の退職した理由と対立する条件とは言い切れないし、女性の結婚・出産後までの就業継続の決定的促進要因となっているとはいえない。

○ 昇進等の見込みと就業継続

ところで、しばしば男性と比較して、女性は上位の職位への昇進やより高い収入を得るといふ職業的成功が見込めないことが結婚・出産による退職の一因といわれることがある。この上向移動、いわゆる出世の見込みと就業継続との関係はどのようなのであろうか。

これも今回の調査結果からは、必ずしも出世の見込みがあれば就業継続し、なければ退職するともいえない。就業継続している人々は、昇進のための主任試験や教頭試験を受けないといっている。一度は挑戦した場合でも全力を傾けるような形で受験したわけではない。合格の見込みがなくてあきらめたというよりも、筋の通らない仕事を無理してやってまで、今以上を望まないという方が女性の実際の意識により即しているようにみえる。

結婚・出産退職した者が再就職した場合は、家庭生活を健全に運営することとのバランスの取り方が上向移動そのものよりも重要だと考えている。つぎの 3 例も、生活全体のバランスや快適さを重視した職業との関わりを求めている姿勢がある。これらのことを斟酌すると、女性は、就業継続者であれ結婚等退職者であれ、家庭生活を円滑にすすめていけるような職業との関わりをもつことが、結婚後にはいつも基本になっていると思われる。

「みんな、(契約社員でなく)本職だったらいいのにねーってしてくれるけどね。そういうのはいいかもわからないけど、わりに気楽に勤められるからその方がよかったんかなと思ったりもするんですけど」(ケース 15)

「もちろん、自分の仕事に対する未練はありましたけれども、それはそれで仕方ないかなとそのときは」（ケース 16）

「中学時代も私は自立したいとはいいていないですよ。そういう意味で、ほんとはずっと続けていくのが良かったのかもしれないけども、どうかだろうかな。」（ケース 46）

<再就職の条件>

つぎに結婚・出産後の再就職の条件として重要視されているのは、第一に、勤務時間の短さ、または自分で調整できる柔軟さ、第二に、通勤の近さと容易さ、第三に、気持ちよく働ける人間関係などの職場環境である。収入は、投入する時間とエネルギーとのバランスがとれていればとくに問題になっていない。いずれにしても、職場では誠実に自分なりの熱心さで働いている。優先順位の高い大切な家庭を離れてまで働きに出ているということであるので、当然なのであろうか。嫌ならばやめるという道があり、パートタイムやアルバイトといっても自分の中での納得した職場と仕事でなければ、就業する価値を与えられないということであろう。

したがって、仕事に対して、① 現時点の仕事に正直に熱意をもって向かう、② 社会正義や自己の価値観に反すると思われることに耐えてまで現時点の仕事を継続しない、③ 収入や地位の高さよりも働き易さや職場生活の快適さを重視する、ということが共通してみられる。

(2) 離死別と職業

死別が1人、離別が1人、死別を目前にしている者1人の3例があった。いずれも、子どもの生活に心を砕きながら家庭運営の責任を果たし、生活していくために職業活動をしている。それぞれについては、整理票 ***結婚・出産をした時、退職または就業継続についてみられた意識と行動** (146頁) のケース5、ケース6、ケース28の箇所に要約しているとおりである。

これらをみると、離死別や夫の病気によって女性が就業しなければならない場合に、家事・育児について、身内の積極的な援助があるとはいえない。これは、結婚・出産によって退職した場合でも、就業継続をしてもかわらない。また、そうした事態においても女性自身は、育児や病夫の介護を優先した職業との関わり方を選ぶという態度がある。やはり、子どもの生活場所の確保、通勤場所、勤務時間は優先される就業条件である。

「(県内転勤では、子どもを自宅において) **最初はアパート住まいでしたけど。そこから自分が通ってました・・・今は(通勤が遠いし、子どもが家を出ているので)、自分がアパートを借りている**」(ケース5)

「(働く基準は) **保育園もやっぱり5時ぐらいで終わりますわな、仕事。子供はほかの保育園に行っているけど、やっぱり5時ぐらい。その帰りに迎えにいった**」(ケース6)

「その時期に主人がちょっとぐあいが悪くなりつつあったしというのがあって、それだったら自転車で通えて、何かあったときにすぐ帰ってこれるところというのを、主人を一番に考えたんですね」(ケース28)

これらの人々は、子どもが小さいときは、育児について母親が孤軍奮闘している。子どもが成長すると母子が支え合う面もあるが、それまでは、母親は、本当に、大変に、孤独な戦いをしているように窺える。事例数が少ないので詳しい分析は、もちろん控えることとするが、女性が結婚することは、跡取りでない場合は、実家からみると、まさに「婚出」であって、家を出ていった者なのであろうか。その上、夫の実家からみれば、亡くなった者の妻はもともと他人だということになる。それ故、結婚して自立した後に、女性に生活上の重大かつ継続的な不安が生じた場合には、どちらの身内にとっても、むしろ、その重大さと継続性の故に、その不安に対応する具体的援助を提供し難い対象となるのであろう。たとえ、家事・育児であっても、婚出した者の生活の一部について実家の身内の力を頼って継続的援助を求めることには、かなり厳しい現実があるといえるように思われる。

これに関して、自分自身の夫は健在で、現在、夫婦で共同して自営業に携わっている者が、従業員管理や地域活動の経験、また、過去に大企業に勤務した経験を踏まえて、つぎのよう

にいつている。

「たとえば、仕事は絶対やめないってすると、男性の場合だと、介護の問題とか子どもの問題が生じたときに、男性の場合は彼に仕事を継続させるために周りが全部サポートするわけね。彼が会社に行くためには、じゃ、私が何時間だけ預かってあげよう、じゃ、私がそばに引っ越して面倒みてあげようというふうになるのに、女性の場合は、すごく波風が立つ。自分が仕事をするためには、世間は男性のようにはみなくて・・・なんでもそこまでして仕事にしがみつくのとかっていつて、世間の見方は、まだまだ女性に対してそういうときにはすごくきついですね。今でもそうだと思いますね」(ケース 26)

これをみても離死別後の母として、女性が日常生活の中で心身に背負う負担は苛酷なものがあると予測される。その負担は、ただ単に、重く大きいというよりも、傍目ではどうてい推察しきれない複雑微妙なものがあると考えられる。やはり、こうした性格の問題があるとすれば、離死別後の母子の生活自立に関する問題は、私的な解決に大きく期待すべきものではないのであろう。

離死別や夫の病気によって生計の担い手となった調査対象者にとって、職業は、第一に子どもと自分が生きていくためのものである。職業の意義としてそれ以外のことは付随してきているに過ぎない。そこが職業との関わり方で夫と離死別する以前との最も大きな違いである。そういったことを背景にして、子の養育や夫の介護の責任を全うした時期には、それまでの職業との関わりを、一旦、清算して、別の新しい生き方をしてみたいと考えている。

6. 現代社会を生きること未来を育む女性

(1) 女性は結婚・出産を機に、何故、退職したか。何故、退職しなかったか

今回の調査の結果では、あらためて女性のキャリア形成と結婚、出産、育児という事柄との関わりが深さが把握された。職業との関わり方からみた女性の長期にわたるキャリア形成については、結婚後の家庭についての女性自身の考え方が最も大きく影響していた。とくに、未成年の子どもの養育は直接自分の手で行いたいという希望や自分の手で行うことが必要だという考え方は、女性が職業から一旦は離れるはっきりした理由となっている。そうした育児についての考え方は、女性の中に自分自身の考えとして確立している例が多い。

調査対象者が出産・育児に当たっていた時代は、日本全体の情勢としては、ちょうど、女性の職場進出を促すための施策が強力に押し進められ始めた頃であった。勤労婦人福祉法の公布(1972年)、国際婦人年(1975年)、教員等の育児休業法¹の制定(1975年)が行われ、その後、民間企業に適用される育児休業奨励金制度の創設(1975年)、育児休業の普及を政

¹ 義務教育諸学校等の女子教育職員及び医療施設、福祉施設等の看護婦、保母等の育児休業に関する法律(法62(昭50))

府が呼びかける育児休業制度普及旬間²の設定（第1回は1982年）等が行われ、やがて、男女雇用機会均等法³(1985)が制定された。

こうした時代にあって、19人の調査対象者は自らの行動を決定していったのであるが、それはつぎのようなものだったといえよう。

まず、結婚し、出産した18人のうち、結婚・出産後も継続してそれ以前の職業に就業していた者は4人であった。それらの人々は全員が公立の学校教員か保育士であった。しかし、公立の保育士であっても結婚を機に退職し、家事・育児を優先した者が1名いる。

これらの者が出産した頃は、教員等の人材確保が国家的課題となっていた。それが採用だけでなく育児休業という制度をこれら専門職に適用する重要な理由であったこと、また、実際に公立機関のこれら専門職女性が出産後も就業継続するための労働条件が他の職業や職場に比較して良好であったことは、調査対象者自身が認めている。ところが、就業継続した者4人のうち3人は、そうした条件にたって、就業継続について固い意思を持っていたというわけではない。夫の意向を受けたり、夫と死別したことが長く就業したことの主たる要因になっていた。残る1人は、教員資格をとる時期に家庭の経済状況が苦しく、姉夫婦から物心両面の援助を受けたという事情がある。“免許を取らせてもらった”ことに対する深い思いがあることを無視できない。

さらに、これらの人々は現在、上位の職位への昇進の努力よりも、現場で実践家として、より優れた職務遂行を行うために努力していくことを望んでいる。

就業継続しなかった者14名は、自分の子は自分の手で育てることを希望し、子どもを預けてまでも職業を継続する意思はなかったため、退職した。この行動には学歴による違いがあるとはみられない。

雇用労働者でない場合も同様の行動がある。自宅でピアノ講師を週に数日だけ行っている者は、自分の子を自分で育てられることが良いことであり、それを実行できる立場にあることが自身の幸せであると納得しており、この者は夫の転勤等でも講師の活動を一時中断している。

この当時、既に前記のような働く女性に対する育児支援が国の施策としてあったことをこれらの調査対象者はもちろん知っていたようである。実際に育児休業が取り入れられている企業に勤めており、それを利用することは可能であったと述べている者もいる。

したがって、現時点で、第三者がこれらの人々には調査で把握できなかったさまざまな事情が当時あったから退職したのではないかと推測するよりも、やはり、最終的には女性自身の育児観と育児方針が本人の退職と結びついたものとみることが素直な解釈である。女性は

² その後「月間」となり、1994年まで続く。1995年には民間企業に適用される育児休業法が公布される。

³ 雇用の分野における男女の均等な機会及び待遇の確保等に関する法律(法45(昭60)、法92(平9))

自らの行動を育児やその方法に関する自己の価値観に基づいて選択し、行動の原動力となったのは、内発的な動機づけ⁴によるものであったといえよう。

この意識と行動の結果から続く自然の成り行きであろうが、一旦、退職した女性達はみな、ある期間がたつと、再び何らかの形で就業を始めている。就業は内職であれ、雇用労働であれ、子どもの生活に支障を及ぼさないような配慮がなされた働き方である。

また、再び就業を開始するまでの期間には 10 年以上の幅がある。人それぞれの判断で、上の子が小学校就学以前から下の子が高校生になるまでの間に幅広く分布している。最も多いのは下の子が小学校に入学する頃というものである。しかし、職業への復帰が妥当な時期をいつとするのかということは、母である女性自身が子どもの自立の時期をいつとみるかによっているのである。

すなわち、子どもが一定年齢になるまでは育児を自分で行うという自分自身の方針があるときは、女性は出産を機に、あるいは、出産を前提とする結婚を機に退職する。育児休業などの制度があること、経済的豊かさ、実母など身内の育児援助の可能性などその他の条件が整っていたとしても、育児を直接自分の手で行うという方針をもった女性は、出産までに職業から一旦離れている。公立機関の保育士等の専門職の資格と実務経験をもっていたとしても同じである。

ここで、就業継続した者について、もう一度、育児と職業との関係をみると、これらの就業継続した者にも就業の仕方に関して養育や育児のための時間を確保しようとする努力があり、労働時間や通勤条件を調整する行動が把握される。夫との死別後の生活を自分が主体となって担っており、職業に従事していなければならない場合であっても、子どもの面倒をみるための時間の確保は最優先条件のひとつになっている。

これについては、もちろん、夫や親など周囲から期待される役割との関係があるとしても、就業中断者にみられた自分の子は“自分の手で育てる”という育児のあり方と本質では共通する意識が感じ取れるのではないであろうか。さらに、この行動を理解するのに参考になるのが、未婚者が若年期に計画した職業選択の条件である。ただ 1 人ではあるが、この事例では、その立場においては可能な限り十分な情報のもとに計画し、着実に職業選択を実行して

⁴ 個人が活動そのものに対する興味などの内的な力によって行動を動機づけられること。さまざまな形の賞や罰、たとえば、金銭的利益、名誉や地位、周囲からの賞賛、身体的快樂の得失などに基づかない動機、すなわち、外的な報酬を得るという動機によらずに行動することである。障害を克服し力を振り絞って、困難なこともできるだけ早く立派に行おうとする達成動機 (Murray, H. A. and collaborators 1938 *Explanations in Personality*, New York: Oxford University Press (『パーソナリティ』 外林大作訳編 1961 誠信書房) も内発的動機づけをもたらすものである。内発的動機による行動は外発的動機に基づく行動よりも長くつづき、ときには永続性がある。行動の結果には高度の質が追求され、しばしば、個人の人格的成長を促す。Deci, E.L. は、外的報酬は内的動機づけを低下させることを実証した。また、内発的動機による行動が具体化されることについて、自己決定や自立性を重視した。

いているが、その計画のなかで、結婚後の就業継続を容易にする具体的な働き方として勤務時間の柔軟さ等を条件としていた。このことを想起しなければならない。

つまり、女性にとっては、生涯のキャリアを考えたときに、職業よりも重要な意味をもつのが子どもの養育であり、育児だということになる。子を育てることは、単に育児という生活上のイベントではなく、人生の生き方としてその対応を考える事柄になっていると思われる。それゆえ、出産によって退職するかどうかは、人生そのものの生き方を選ぶために計画する育児方法の違いによって決まることになるという現象が生じているといえよう。また、そういう選択の理念があるので、退職しても時期が来れば、安定した暮らし方と家族の生活リズムを狂わさないという条件の下に、日常生活の進行に具合のよい職業を探す行動に移れるのではないであろうか。

ところで、育児休業制度が勤務先にあることは就業継続の可能性を高めるが、育児休業制度そのものは女性の就業継続に直接は影響しないという知見を示した先行研究がある（日本労働研究機構 2003）。その研究の中では、出産退職した女性は自らの育児観をもとに出産退職をする者が多いことが指摘されている。そのことは、今回の調査対象者の行動と意識に整合するものだといえる。これについては、つぎのように考えることができる。

育児休業は自分の子を自分で育てるという要請に対応しているようにみえても、女性が自身の生き方として、いいかえれば生涯に果たすべき任務として、子を“直接”かつ“自分の手”で育てるという育児方針とは、基本理念が全面的には一致しないという面がある。たとえば、就業継続を前提として休業するという制度は、果たすべき任務としての育児のために、子どもや家庭状況に合わせた働き方をするという明確な意思をもつ当事者の立場に立てば、就業の条件と目的の位置関係が一致しない。調査対象者となった女性は、子どもを育てながら働くことができるかどうかという文脈で思考したのであり、働きながら子どもを育てるかどうかという文脈で行動を決定したのではないためである（誤解を避けるために、くどくはなるが、育児休業制度が女性の就業継続促進に無力であると言っているわけではない。就業継続をした調査対象者のなかには、育児休業制度の利用を就業継続の主要な要因とはしていないものの、実際に当該制度を利用した例がある）。

さらに、職場復帰の妥当な時期については、長子が保育園入所年齢から末子が高校在学までと大きなばらつきがある。復帰の理由に子どもの教育上の理由をあげる者がいることにも注目する必要があるだろう。また、必ずしも職業ではなく、無償あるいは実費相当の報酬を得るに止まる地域活動等への参加を職業への再就職と同じ意味に捉える者もいる。もちろん、「損になるならやらない」者や使用時間に見合った収入の高さを計算して就業先を選ぶ者もいるので、再就職に当たって、職業の経済的効果を軽く考えているわけではない。むしろ、ここでも生活全体に投入しなければならないエネルギーや心身の負担に関して、職業活動よりも

重要なこととのバランスをとりながら配分した結果となっているというのが適切ではないであろうか。

(2) 女性は就業の中断を望んではいない

ところで、女性は結婚・出産を機に就業を中断することを望んでいるのであろうか。答えは、否であろう。次の2つの面からみると、生活上の条件さえ整っていれば、特段、就業を中断しなければならないとは思っていないと思われる。

第一に、就業継続をした者がいるという事実である。第二には、中断した者のなかにも、もし、専門職であったならば就業を継続したかもしれないという者(ケース 46)がいるし、仕事に未練があったと明言する者(ケース 16)もいる。退職理由は単に「家庭とのバランス」からであったという意味にとれる説明をする者もいる(ケース 15、ケース 40)。さらに、それまでの勤務先でそれまでの仕事をそのまま続けるということに限定しなければ、出産後も職業に従事すること自体を中断したいと積極的に考えていなかった人々がいる。また、出産後、実家が自営業であった者は長子がまだ乳児期に実家の手伝いをはじめている(ケース 59)。

自営業者の妻となった場合をみると、このことがより理解しやすくなる。たとえば、自営業の家庭の主婦は、家事・育児と同時に自営業の強力な担い手としての役割を出産・育児期を通してずっとこなしている。夫との役割分担で育児を任せ、専業主婦であったと語る時も、その言葉に続けて夫の仕事のサポートを具体的にしたというのである。そのことを苦痛とした者はいない。

農家の嫁として苦悩し、雇用労働者となった者も、パートタイム就業と同時に舅夫婦の農業を手伝うことはやめていない。当時は、農作業自体は快く従事したわけではないが、舅夫婦が既に世を去ったあとは現在まで自発的に自信を持って農作業を行っている。

今回の調査対象者の場合の自営業では、自分の家庭生活の圏域と自営する事業での職業活動の場が物理的に同一あるいはきわめて近い距離にあった。また、労働時間の調整も自分の意思で可能な状況があった。こういうときには、職業に従事しているとか、就業を継続するといったことをことさらに強く意識せずに、実際は職業活動を行うことになっていた。

<共通の職業との関わり方>

このようにして19人の女性の35年間の人生の歩みをみると、結婚・出産を機に就業を中断するかどうかに関わらず、これらの人々の職業との関わり方に共通する特徴がありそうと思われる。それは、女性は、結局のところ、職業活動と子の養育を比較して、子の養育とそのための家庭運営をより優先すべきものと位置づけていたこと、そして、結婚や出産を迎えた時には、その時に選択可能な選択肢を自分の価値観や生き方の方針に沿って選択したことである。このとき、選択肢は育児か職業かという二肢択一ではなかった。より優先する選択肢を採用して、なお、生活に支障がなければもう一つの選択肢も同時に採用しうるもので

あった。そして、実際に2つを同時に採用した者が就業継続をしていたということである。

したがって、就業場所、労働時間や勤務形態などの就業条件、夫の意向、身内の女性による応援態勢などを総合的に見て、当事者にとって好ましい一定の条件が整っていれば、多くの女性は就業を中断しなかったことが予測される。

既婚女性の就業については、最近では育児援助の必要性から育児休業制度の長所がしばしば強調されることが多い。しかし、今回の調査結果からは、育児休業という制度よりも、女性が人生の生き方として意図している育児の役割との調和が図れるような日常的な就業条件が整えられることが出産後の女性の就業を促していた。すなわち、就業場所や労働時間等の就業条件が女性の就業継続に大きな影響を与えていることが示唆されている。

もちろん、これは女性が非正規雇用といわれる働き方を望んでいるということにはならない。総合的判断のもととなる就業条件には、通勤、残業、休暇、作業環境とならんで仕事の社会的意義といったものが含まれている。単純に短時間労働や軽易な作業を望んでいるのでは決してない。既に述べたように、就業継続をすとなれば、非常に多くの努力を払って職場での業務と取り組んでいる。また、出産退職したあとに職業に復帰した者も含めて、みな同様に仕事に対する誠実さや熱意は十分なものであるし、やりがいや社会的意義を大切にしている。

要は、女性自身が判断する育児期間という期間に、“子どもを育てながら働ける”仕事と職場であるか、または、その期間に子どもを育てながら働くことが働かない場合よりも、自分の価値観からみた人生の価値をより高めるかどうか、女性にとっては職業との関わりにおいて重要なのである。

ある意味で、結婚・出産に当たって、女性は現時点の状況にとらわれて就業継続の判断をしているのではなく、長期的な視野で自身の生き方を選んでいる。その根底には女性を取り巻く社会環境、あるいは文化や歴史的背景が陰を投げている面があるとしても、その時点での、行動を自分で選択しているということは事実である。現状では、多くの者は、一旦、職業活動を中断していた。しかしながら、明日には、また、職業やその他の活動を通じてより広い範囲での社会参加を実現することができるという希望をもち、その後、実際に希望を実現して社会参加を実行していくことになっていた。

なお、夫との離死別があった場合に、女性が背負う負担はいかにも大きく、それに対する援助は少なくとも当事者の女性の目から見ると負担の大きさに見合った手厚さのものではない。就業を継続した者は、健康な夫との平和な生活がある時にも、身内の育児援助を受けたことで就業が可能となったという実感をもっている。にもかかわらず、寡婦等になった女性に対する社会の対応、とくに身内を含めた周囲の対応は相当に厳しくなっているように思われる。もちろん、これはさまざまな例があり、今回の3例だけではなんともいえないところ

であるが、しかし、生活を支えるために就業継続が必須になった時の女性が味わう苦痛にこそ、女性が職業に従事することや職業キャリア形成に関する真の問題が潜んでいるように思われる。

(3) 女性は再び職業活動を開始する

一旦、就業を中断したとしても、調査対象者はあるときに全員が職業活動（含む地域活動）に復帰している。それぞれ前向きな態度でしっかり働こうとしている。ただし、若い時期に一旦、退職したこともあって、過去の職業経験はとくにその後の職業選択や処遇に影響していない。学歴も影響していない。免許制や登録制の資格があったときにはそれが手懸かりになっているが、それも決定的なものとして普遍化できるかどうかは疑問が残る。

さらに、さまざまな経過と形態で職業に復帰して働いている女性は、それらのことを不満としていない状況がある。その理由は、職業選択の重要な条件が職種や社会的評価の高い地位ではないからだと思われる。さらに、就業を行う動機は、社会参加への内発的な動機によるものだからであろう。

とにかく、最も重要なことは、就業を一旦は中断しても、女性は再び就業を再開するということである。人口減少時代となった日本では、活気ある女性労働力がいきいきとその力を発揮できるようにするのは、社会や国に課せられた課題となっている。女性が自らの実力を生かそうとする具体的な意思と行動を実現することが保障されることの社会的意義は大きい。結婚・出産退職の如何にかかわらず、より多くの女性が円滑に職業に取り組める条件整備とはどのようなものであるのかを、これまで以上に研究していくことは重要だと思われる。

7. キャリアの自己採点は全員が合格点（小括）

今回の調査は、職業活動に注意を向けながら中学卒業時から50歳までの人生の35年間の歩みについてインタビューした。その結果、女性の調査対象者19人のすべてが自分のこれまでの人生の歩み、すなわち、キャリアを評価して、100点満点であれば、70点以上ほぼ100点近くまでの得点を与えている。自分のキャリアは、人間としての任務を果たしてきたし、また、納得できる程度の人生の満足感や充実感が自覚されるものであることから、総合して及第であるという。職業との関わりについても、時には環境に合わせて流されてきたかのように言葉の上では表現することがあっても、実際は自己選択であり、選択行動を起こすことには自己の判断が必ずあったという感慨を持っている。こうした過去の自己選択を認めることができる人々が自己のキャリアに合格点を与えるのであろう。

印象深いのは、やはり女性が母親として子どもに果たす責務を強く意識して生き方を選んでいることである。もちろん、親にとっての子どもの意味や価値は時代と社会経済の状況によって変化するものでもある（柏木 2001）。しかし、いつの時代であっても、女性は、子

を胎内に育み、生み、自身の体内で作った栄養を授乳して与えるという生理的機能を有する性である。このことが現代の女性の育児観、育児方針などに深く関わっていることは事実だと思われる状況が調査の結果から把握された。おそらくは、その事実は、今後のいつの時代でも、いうまでもなく尊重されねばならないことなのである。

今回の調査では、こうした女性の特徴と、それとあわせて文化や歴史に裏付けられた社会環境が女性の就業問題に大きな影響を与えていることが今更ながら確認された。同時に、女性はこれらの諸問題を意識または無意識の上で知っていて、その時々状況の中で最も自分にふさわしい回答を得ようとしているし、必要の都度、明日にどう生きるかを思いやるなかで自分の考えに基づいて対応を選択していた。結局は、自分ができる範囲の選択を自分でしたという意識をもとに自身のキャリアを評価していることが把握されたといえよう。

なお、育児とは次元が異なる老親介護についても、女性が自らの手で直接担おうする行動がいくつもみられた。これを含めて文化や歴史に裏付けられた女性を取り巻く社会環境が女性の就業に及ぼす影響については、それだけで長大な研究報告書が必要になるであろう。今回は、別途の研究にその詳しい検討・分析を譲ることとして、問題の所在を提起するにとどめることとする。

引用文献

デシ、E.L. (1980) 安藤延男・石田梅男訳『内発的動機づけ—実験社会心理学的アプローチ』誠信書房

Deci, E.L.(1971). Intrinsic motivation, extrinsic reinforcement, and inequity. *Journal of Personality and Social Psychology*, 22, 113-120.

柏木恵子 (2001) 『子どもという価値 少子化時代の女性の心理』中公新書 1588、中央公論新社

レヴィンソン、D.J. (1980) 南 博訳『人生の四季：中年をいかに生きるか』講談社

日本労働研究機構 (2003) 『育児休業制度に関する調査研究報告書— 「女性の仕事と家庭生活に関する研究調査」結果を中心に —』調査研究報告書 No.157

